

新生

藤井武著

東京岩波書店刊行



始



藤井武著

新
生

岩波書店刊行

325
417



住友務氏寄贈書

685434

序

(1) 序

宗教は必ずしも著者の好む處ではない、否彼は其儀式と制度とを嫌ふ、其教理の多くも亦之を好まない、然し乍ら彼は唯ナザレのイエスを信ずる、イエスは彼の主である、又兄である、又友である、イエスを識つてより彼の生命は一新した、盡きざる力はイエスを源として湧き來り、希望は輝き、歡喜は溢れ、世と己とに對する闘にうち勝ち、艱難の中に在りて深き感謝を繰返すことを得るに至つた、かくて荒野の如くに見えし人生は化して美はしき園となつたのである、彼はこの福を獨り恣にするに忍びない、萬人と共に之を頌むことを希ふ、イエスが彼の眼に如何に映じた乎、イエスに由る新生の光景の一斑は如何、彼は今拙き筆に之を綴りて未だイエスを識ら

ざる人々に紹介すると共に、既にイエスを識つて限なき恩寵を味へる人々の喜びを新にせんと欲するのである。

大正五年三月

柏木に於て

藤井武

附言

本書收むる處みな聖書の教訓が著者の心に訴へたる感想である、而して中「共働者イエス」「子たる者の自由」及「十字架を負ふの歡び」の三篇は嘗て雑誌「聖書の研究」誌上に載せられしもの、同誌主筆にして著者の恩師なる内村監三先生の承諾を得て茲に之を収録したのである。

目次

來りて見よ……………	一頁
來りて見よ……………	一
イエスの二大慰藉……………	一七
イエスの神性……………	三三
共働者イエス……………	四三
教理と信仰……………	五三
新生と希望……………	六一
子たる者の自由……………	六一
活ける水……………	七三
來世の希望……………	八五
一粒の麥……………	一〇五
戦闘と勝利……………	一二三

蛇の如く智く鴿の如く單純……………一三三

孤獨の勝利……………一三三

基督信者の境遇……………一三四

誘惑……………一五五

歡喜と感謝……………一六九

十字架を負ふの歡び……………一六九

心の貧しき者は福なり……………一八四

感恩の殘生……………一九七

目次終

新生

藤井 武著

來りて見よ

人よ、求むる人よ、飽きたる人よ、哀める人よ、歡べる人よ、弱
 き人よ、強き人よ、野に立つ人よ、巷に隠る人よ、若き人よ、老
 いたる人よ、男よ、女よ、萬國の民よ、人といふ凡ての人よ、
 來りて見よ。

何を問ふ平、風に動かさるる草ではない、文繡を着て奢れる者
 ではない、時を遡ること二千年、西亞の一角エルサレム城北の小丘

に來りて其處に十字架に釘けられしナザレのイエスを見よ。
 磔殺の極刑、何の罪の故ぞ、その頭には棘の冕がある、その罪標
 にはユダヤ人の王とある、(而もヘブル、ギリシヤ、ロマの三國語に
 て)王か罪人か、抑も是れ何の謎ぞや。

げにも彼は自ら王なりと言ひしが故に叛逆の罪に問はれたのであ
 る、ピラト彼に曰ひけるは然らば汝は王なるか、イエス答へけるは
 汝の言ふ處の如く我は王なり、我之が爲に生れ之が爲に世に臨れり
 (章約三十傳七節)ユダヤ人叫び曰ひけるは凡て自己を王と爲す者はカイザ
 ルに叛く者なり(同二十九章)彼は言ふ我は王なりと、人は言ふ汝は叛
 逆者なりと、人の言眞である乎、彼の言果して偽でありし乎。
 我之が爲に生れ之が爲に世に臨れりと彼は言うて居る、故に我等
 は暫く彼の一生を見よう、彼の人格と其言行とを見よう、幸にして

歴史は我等の手存つて居る、我等は冷靜なる學者の態度を以て暫
 く之を検して見よう。

彼の在世三十三年、その晩年に至るまでの隠れたる生活に就ては
 之を措き、ヨルダン川の畔にてバプテスマのヨハネが彼を世に紹介
 してより人はナザレのイエスを知らざるを得なくなつた、彼はユダ
 ヤ、ガリラヤの野を巡つて天國の好き音信を傳へた、彼に由りて
 病める者は癒され、貧しき者は福音を聞かせられた、彼は罪人の友と
 なり又その罪を赦した、彼は僕の如くに人に仕へ終まで之を愛した、
 洵に彼は此世の王らしくはなかつた、然しながら彼は言うた、「我國
 はこの世の國にあらず(章約三十傳六十八)と、彼は自ら神の子なりと稱した、
 而して此世の國の王ならざる神の子として彼の生涯は實にふさはし
 きものであつた、彼がその言と行とを以て特別に深く教へたる事は

「愛であつた、彼の一生は愛の一生であつた、寸毫も己の爲にせず徹頭徹尾人を愛し人の爲にするの生活、これ彼の一生であつた、彼の生涯には又罪なるものを指摘することができない、彼をさばさしビラトが「我斯人に罪あるを見ずと繰返し叫びたるは實に故ある事であつた、之を要するに彼の一生は勿論尋常なるものではなかつた、極めて優れたるものであつた、偉大なるものであつた、王らしきものであつた、然しながら此世の王らしくはなかつた、天國の王らしくあつた、神の子らしき一生であつた、心を虚しくして彼の一生を探る者は其死を見る前と雖も少くともこのらしさを打消す事はできない、是はこれ公平なる歴史家としての見解である。

彼は世に在る限り人を愛した、彼は羊の爲に命を捐つる善き牧者の如くに世を愛した、然し世は果して羊でありし乎、人は彼の濃き

愛に酬ゆるに柔順を以てした乎、否、彼れ己の國に來りしに其民之を接けざりき(約翰傳一 章十一節)、善き牧者に牧せらるべき羊は既に羊ではなかつた、其柔順の性は全く失せて居た、却て叛逆が習となつて居た、狼の害より己を守らんとて來りし牧者に向ひ羊は却て自ら狼となつて迎へた、イエス人を愛すること愈々深ければ人イエスを惡むこと益々烈しかつた、彼は人の爲に命をも捐てんとすれば人は之に先だちて自ら彼を無きものにせんとした、羊は遂に善き牧者を噛せんとするのである、イエスは神の子らしく人を愛したるが爲め却て虐殺せられんとするのである、「ピラト、ユダヤ人に曰ひけるは汝等の左を見よ、彼等喊叫びて、之を除け、之を除け、十字架に釘けよと曰ふ(約翰傳五章)、噫、愛に酬ゆるに十字架、何等の罪ぞ、何等の叛逆ぞ、抑もかゝる罪に對する善き牧者の處置は何であるべき乎、イエ

彼の愛は人の叛逆に對して如何なる態を取りし乎。
 彼は素より事の終に此處に至るべきをいとも明瞭に豫知して居た、
 彼は二たび三たび其事を豫言した、彼にして若し此禍を免れんと欲
 するならば途はあつたのであらう、勿論人のかゝる叛逆に至らずし
 て悔改めんことは彼の願であつた、然しながらその遂に不可能であ
 る以上自ら難を免れやうとは欲はなかつた、
 今わが心憂へ悼めり、何を言はんや、父よ、此時より我を救ひ給
 へと言はんか、否之が爲に我この時に至れるなり、願はくは父よ、
 汝の名の榮を顯はせ(十約七輪傳二十二章三)
 之れ受難の前に彼の祈りし言葉である、やがて時進みて愈々捕卒は
 彼に迫つた、ケデロンの河に近き園の中である、イエスと共に在り
 しシモンペテロは堪らなくなつた、彼の熱血は湧き立つた、忽ち劔

を抜いで一敵の耳を斬り落した、その時イエスは口を開いて言うた、
 劔を鞘に收めよ、父の我に賜ひし杯を我飲まざらんや(同十八章)
 柔順なるは羊に非ずして却て牧者である、事茲に至るも彼は唯父と
 人とあるを知つて己あるを知らない。

* * *
 十字架は遂に立てられた、イエスは遂に釘けられた。
 * * *
 來りて見よ。

悼ましき姿かな、棘の冕を戴き衣は剝がれ兩手を展べて彼は懸つ
 て居る、その面には限なき憂愁の色が漂うて居る、然しながら其を
 も壓して人の凡て思ふ處に過ぐる大愛の光が輝き渡つて居る。
 見よ、今彼の口は開く、敬虔なる祈の聲は我等の耳を衝いて來る、
 父よ、彼等を救し給へ、其爲す處を知らざるが故なり(路加傳二十三)

父よ、彼等を……、然り、彼等——叛逆者——わが敵——を如何にし給へ
 とや、罰し給へ？ 滅ぼし給へ？ 否とよ、「彼等を赦し給へ」是れ果し
 て眞なる乎、何等の倒錯、何等の苦衷、何等の忍耐、何等の寛容、
 噫、驚くべき彼の大爱かな、かゝる愛を人は未だ嘗て見た事がない、
 げにも之を聞きし事はある、「汝等の敵を愛み汝等を誣ふ者を祝し汝
 等を憎む者を善視し虐遇迫害者の爲に祈禱せよ」と(馬太傳五章)、是れ
 嘗て山上にて彼の訓へ給ひし處であつた、圖らざりき今日我等自ら
 敵となりて彼の言の欺かざるを實見せむとは、悔恨、感激交々至り
 熱涙滂沱として湧くを禁じない。

果然隣に懸けられたる罪人の一人は之を聞いて胸を拊つた、「かく
 てイエスに曰ひけるは、主よ、聖國に來らん時我を憶ひ給へ」、思は
 ざる時思はざる人よりこの純なる告白を受けてイエスの慰藉は如何

ばかりなりしぞ、事の終は寸刻の後に迫つて居る、而して新しき福
 音は猶も彼の唇に上つた、

「誠に我れ汝に告げん、今日汝は我と共に樂園に在るべし(同四十一節)
 今日である、「我と共にである、而して樂園である、殊に罪人に向て
 である、鮮やかに福音、いみじき同情、茲に又人らしからざる愛の
 閃きを見る。」

十字架の傍に悲痛の面を擡げて立てるは何人ぞ、イエスの一瞥は
 母と愛弟子との上に注いだ、聞け、又彼の唇は動く、

婦よ、これ汝の子なり」

「これ汝の母なり(約翰傳十九章三十一節)

地に遣し往く母を憶うて彼の濃やかなる愛情は是の如くに溢れ出で
 たのである、語は短し、されど其裏にいひがたき悲み、斷腸の苦痛、

而して海の如き浩愛が籠つて居る。
やがて物凄き寂寞は世を蔽うた、晝の十二時頃より三時に至る迄
地の上面は黒暗となつた、黒暗その絶頂に達した時忽ち裂帛の叫び
は耳を劈いた。

「エリ、エリ、ラマサバクタニ我が神、我神、何ぞ我を棄て給ふや」
(馬太傳二十五章三十四節)

愛する世の人よ、何ぞ悔改めざるや、我が神よ、何ぞかく迄に見棄
て給ふやと、よし此語が神の獨子の自覺最も鮮明なりし彼れイエス
の口に出でては素より絶望の聲でないことは論を俟たずと雖も、そ
の最も深刻なる苦悶の絶叫たるは明かである、噫、彼をしてかくま
でに悶えしむる者は抑も何人ぞや、我等の叛逆の矛は今し彼の心臓
を抉つたのである、我等の爲に父の賜ひし杯は今し彼れの飲み干す

處となつたのである、懼るべき犠牲の苦み、之みな我等の爲である、
然り悉く我等の爲である、痛恨何ぞ堪へむ、慚愧何ぞ禁へむ。

かくして絶大の苦痛は十分に味ひ盡された、人は己が叛逆の罪の
深さ恐ろしさを面のあたり隈なく見せつけられた、その時イエスの
事は竟つた、彼の貴き面は和いだ、

「我渴く」(約二章十八節)
聲に應じて兵卒の呈せし醋を受くるや、

「事竟りぬ」(同三)
忽ち最後の大聲は響いた、

「父よ、我靈を汝の手に託く」(路加傳二十四)
首は終に俯れたのである。

* * * * *

人よ、汝は何を見たるや。
「罪！」

然り、十字架の罪である、極罪である、叛逆である、然も眞の罪人は誰ぞ。

釘けられたる彼に罪はなかつた、彼は愛した、惟我等を愛した、而して我等は彼を釘けた、エリ、エリ、ラマサバクタニと罪なき彼は十字架上に悶えた。

人よ、汝の見たる罪は誰の罪ぞ。

「愛！」

然り、母を愛し、罪人を愛するのみならず、敵を愛するの愛である、愛の爲に甘んじて身を敵手に付し、而して祈るところは、父よ、彼等を赦し給へである、是は善き牧者の愛よりも大なるものである、是

れ到底人の愛ではない。十字架の愛は誰の愛ぞ。天よ、汝を見たるは誰の愛ぞ。

人よ、汝の見たる愛は誰の愛ぞ。天よ、汝を見たるは誰の愛ぞ。十字架――一線地に沿うて横はり、一線天より之を貫く、横はるものは我等の罪にあらずや、貫くものは神の愛にあらずや。

我等の見たるものは斯罪と斯愛である、斯罪の爲に苦み斯愛によりて我等を赦すイエスである、今や彼は神の子らしき者ではない、我等その榮を見るに實に父の生み給へる獨子の榮にして恩寵と眞

實にて充てり(約翰傳一 章十四節)、彼こそ確に神の生み給へる獨子である、其の貴き苦悶と測り難き愛

とを見た時に、我等の頑き心は割然として碎けざるを得ない、無限の悔恨と、いひ知らぬ感謝とは洪水の如くに胸を衝いて來て、熱き涙は迸るのである、涙に曇りし眼を擧げて我等は神を仰ぐのである、

父よ！我知らず斯く叫び出づるのである、願はくは赦し給へ、といひて彼に縋るのである、而して思ふ處に過ぐる慈愛を以て彼に迎へらるゝのである、舊き叛逆は悉く癒されて我等はもはや罪の軛の下に苦まないのである、今や我が主はイエスキリストである、彼の靈が我等の心に臨みて全く我等を支配するのである、彼の僕となりて我等は從來豫想だもせざりし大自由を取得するのである、今や闘うて勝たざるはない、苦みて恵まれざるはない、躓きて更に大なる望を回復せざるはない、勿論今猶艱難はある、涙はある、罪も全く消え去らない、然しながら身に餘る恩寵は日に我等を俟つのである、盡さざる慰藉は常に彼より來るのである、罪を憎むの心は次第に我が性格となり往くのである、今や天と地とは新しき光明を以て我を包み内心は歡喜と感謝との歌を唱して之に應ずるのである、十字架

上のイエスキリストを見たる其時より我等の生命は一變したのである。
 人よ、來りて彼を見よ、彼は汝の叛逆を癒し代ふるに信と望と愛とを以てする、我等の生活の價値と意義とは唯此くして得らるゝのみである、我等は天下一人の彼を知らざる者あるを欲しない、我等は世に在る限り萬民に向て繰返し叫ばんと欲する、曰く
 來りてイエスキリストを見よと。
 註 來りて見よとはイエスが自己を其最初の弟子に紹介し給ひし時並に最初の弟子が又その友にイエスを紹介したる時に用ゐられたる言葉であつて謂はゞ基督教の産聲ともいふべきものである、かく言へるを弟子(パブテスマのヨハネ)聞きてイエスに従ひ往けり、イエス彼等の従へるを回顧て、汝等何を求むるや、

と彼等に問ふ、答へてテビ何處に住るやと曰ふ、イエス彼等に
 來りて見よと曰ひ給ひければ云々(約八、三十一、三十三)、ピリポ、ナタ
 ナエルに遇ひて曰ひけるは我等律法の中にモーセが載せたる
 ころ豫言者の記し、所の者に遇へり、即ちヨセフの子ナザレの
 イエスなり、ナタナエル言ひけるはナザレより何の善き者出で
 んや、ピリポ彼に曰ひけるは來りて見よ(同四十六、五)、知るべし、
 基督教は初より教理を翳す事なく唯イエスその人の紹介を以て
 世に現はれし事を、信仰とは彼を見て信ずることである、傳道
 とは彼に就て單純なる證をする事である。

イ エ ス の 二 大 慰 藉

雪をいたゞくヘルモンの嶺は頭に聳え、その尾を引きたる岩根
 こゝしき溪間を傳うて清冽の水幾筋ガラヤの湖さして流れ往くと
 ころ、イエスは親しき少數の弟子を引き連れて歩み給ふのである、
 彼の傳道も最早大分終に近づいた、その權威ある説教も熱愛より出
 づる奇蹟も未だ睡れるガラヤ人の眼を醒すことができない、而も
 時は漸く近づきつゝある、異常の苦みを受けて遂に此世を去り給ふ
 べきその時は今や程遠からぬを自覺し給ふた、人は未だ彼の何人な
 るやを知らざるに神は早や既に彼を招き給ふのである、彼の持み給
 ひしものは今その前後に手を携へて歩める少數の弟子あるのみであ
 つた、彼等は兎に角師を離れじと附き纏ふて居る、假令其中の一人

が後に彼を渡すべき悪魔なることを夙に察知し給ひしとはいへ、又
 たとへ其多數はやはり彼を解すること一般人と多く異ならざるを知
 り給ひしとはいへ、一人或は二人の特別に神よりの黙示を受けて彼
 に關する眞理を解し得た者がないであらうか、殊にかのペテロは如
 何、嘗て夜中海上を歩みて弟子等の舟に近づき給ひし時獨り主よと
 呼びてその許に至らんとせしペテロ(馬太傳二十四章二十八節)、譬をもて福音を語
 り給ひし時その意味の明に解かれんことを欲うて熱心なりしペテロ
(同十五節)、少くとも彼ぐらゐは眞理を見るの眼を開かれて居るので
 はあるまい乎、イエスは人々に就いていたく失望し給うた、唯一縷の
 望を少數の弟子の上に繋ぎ給ふた、
 イエス、カイザリヤピリビの方に到りし時その弟子に問うて曰ひ
 けるは人々は人の子を誰といふや、彼等いひけるは或人はバブテ

スマのヨハネ、或人はエリヤ、或人はエレミヤ、又預言者の一人
 なりといへり(馬太傳十六章十三、十四節)、
 人々は彼の尋常人ならぬを感じて居るは勿論であるが、未だ何人も
 イエスのキリストである事を知る者はない、バブテスマのヨハネ、
 エリヤ、エレミヤ又預言者、之みな信仰の勇士、猶太史上の最大偉
 人、人類中の理想的人物である、然しイエスを稱するに何人を以て
 すとも彼を人類中の偉人として見て居る間は人の眼の曇は未だ拭は
 れないのである、人々は果して彼を了解して居なかつた、イエスは
 今更の如くさびしみを感じ給うた事であらう、乍然是れ彼の豫期し
 給はざりし事ではない、彼のいま知らむと欲し給ふ眞意は人々にあ
 るのではなくして汝等に在るのである、人々は素より未だ我を知ら
 ない、唯汝等は如何、汝等のうちせめて一人又は二人の眞に我を解

に上つた、(ペテロより以前にイエスを稱して神の子なりといひし者はないではないがその何れも彼の如く明白なる了解に基く言でない事は前後の記事を讀みて直に察知し得る處である)、(馬太傳十四章九節等)シモンペテロ實に能くも答へけるかなといはねばならぬ、彼は此時同じ弟子たちを代表して語りしのみならず又實は我等全人類の代言者としてこの眞理の表白をしてくれたのである、若し人類の言葉にして神の子イエスキリストを慰むるものがあつたとすれば即ち此語であるに相違ない、

イエスは、ヨナの子シモン、汝は福なり、その血は肉に示せるに非ず、天に在すわが父なり、我は汝に告げん、汝はペテロなり、我が教會をこの磐の上に住つべし、陰府の門は汝に勝つべからず、我が教會をこの磐の上に住つべし、汝が地に於て

し得た者はないのである乎、我等は我を言ひて誰とする乎、シモンペテロは曰ひけるは、キリスト、活ける神の子なり(同六十五節)、

答へけるは、汝はキリスト、活ける神の子なり、

然、ペテロが居つた、彼がそれであつた、汝は人々のいふが如く

主である、キリスト即ち活ける神の子である、

にも非ず、汝は偉人に非ず、汝イエスこそは偉人以上人類以上の救

短き語句の中にあつた、イエスの性格と此世に來り給ひし使命とは

他にないのである、唯彼に從うて我等の救はるべき途は彼を措いて

世界の最大眞理である、キリストはキリスト、活ける神の子なり、

世界最大の眞理は、キリストはキリスト、活ける神の子なり、

繋ぐことは天に於ても繋ぎ、汝が地に於て釋くことは天に於ても釋くべし(同九十七節)、
 と、以てイエスの満足を察すべしである、福なるかなシモンと言ひ給ひて彼の語調はさながら山上の垂訓のそれである、天に在す父の黙示、「教會の磐石、天國の鑰」と、かゝる多くの高調なる言葉もて酬むられてシモンペテロは恐らく自己の福を喜ぶよりも寧ろ人類に就て重ね々々失望をのみ繰返し給ひし其の主を少しく慰め得たる事を感謝したであらう、世を擧て彼を信ぜず、彼を責め苦め遂に殺さんとして居る間に唯一人ペテロの如く輝くばかりの信仰の告白を以て憂に充ちたる主の心に大なる慰藉を献げたるを思ふときは我等も亦衷心より之を悦び且感謝せざるを得ない、イエスの感じ給ひし最初の慰藉は實に此處にあつた。

然しながらシモンペテロは感情家である、彼は勿論終局に於てはイエスの豫言通り教會の磐石となり使徒中最大者の一人となつたけれども、その茲に至るまでには幾多の激しき動搖に遭遇するを免れなかつた、彼は忽ち電光の閃くが如くに神よりの啓示を受くると雖ども又忽ちその消えて跡なき闇に歸するが如くに人らしき感情に支配せらるゝのである、彼はイエスと寢食を共にし朝夕其深遠なる教訓に親みその人らしからざる浩愛に動かされその驚くべき異能を目撃して遂に彼の性格の何であるかを知ることができた、光榮ある神の子、それでなくてはならぬ、然り我等を率ゐて神の許に至り其右に坐し給ふべき救主キリスト、彼こそは其れであるとペテロは知つた、かくて彼はイエスの光榮を解した、然しながらその受難に思ひ及ぶことはできなかつた、苦痛と耻辱との焦點に立ち給ふべきイエスの

姿を想像することは彼に取て堪へがたき事であつた、而もこの時イ
 エスの特に彼等に教へむとし給ふ處は將に來らむとするその受難で
 ある、死である、
 此時よりイエス其弟子に己のエルサレムに往きて長老、祭司の長、
 學者等より多くの苦みを受け且殺され第三日に甦る等なすべき事
 を示し始む(同二十)、
 ペテロは躓かざるを得なかつた、キリスト活ける神の子にいかで此
 事あらんや、若しかゝる苦き運命がエルサレムに於て彼を俟つなら
 ば主は此際上り給ふべきに非ず、我等は力を盡して彼の安全を護ら
 ざるべからずと、このやうに感じたのであらう、
 ペテロ、イエスを援きとめて、主よ宜からず、此事汝に來るまじ
 といひければ、イエス反顧てペテロにいひ給ひけるは、サタンよ、

我が後に退け、汝は我に礙くものなり、それ汝は神の事を思はず、
 人の事を思へ(同二十三)、
 實にゑらい相違であると言はねばならぬ、曩には教會の磐を以て稱
 せられ、今は忽ち聞くも思はしきサタンの汚名を以て叱せられんと
 は、ペテロといへども餘りに事の意外なるに驚いたであらう、然り
 ながら彼にも増して失望し給ひしは主イエスである、汝はキリスト
 活ける神の子なりと告白しながら猶ほ此最も大切なる受難の眞理、
 十字架の秘義を解する能はざる乎、我若し父の授け給ふ苦き杯を飲
 まずんは人はいつまでも父を識ることができないのである、今我れ
 是が爲に往かむとして汝我を阻む、汝は即ちサタンでなくてはなら
 ぬと、噫サタンか教會の磐か、シモンペテロは實に或時は磐であり、
 或時はサタンであつたのである、此後イエスの渡されんとし給ひし

時に方り、みな汝に礙くとも我は終に礙かじ(二十六章三十三節)とのいとも頼もしい告白をしたにも拘らず、イエスは素氣なく峻拒し給うた、
「我れ洵に汝に告げん、今夜鶏鳴かざる前に汝三度我を知らずといはん(四節三十)と、而して悲しいかな、この豫言も亦見事的中した、さればペテロは遂にイエス昇天の後まで猶ほその憂の種であつた、ヨハネの傳ふる處によればイエス己を三度弟子等に現はし給ひし後、シモンペテロにいひけるは、ヨナの子シモンよ、汝等の者に過りて我を愛するや、彼曰ひけるは、主よ、然り、わが汝を愛することば汝知れり、イエス彼に曰ひけるは、我が羔を牧へ、また再び彼に曰ひけるは、ヨナの子シモンよ、我を愛する乎(約翰傳二十一章十五節以下)かくて三度まで同じ問を以てペテロに訴へ給ひしとある、その切々の愛情とその深刻なる憂愁とを思つて、我等は殆ど堪へがたきを感

ぜざるを得ない、抑もペテロにこの躓きありしは何の故である乎、イエスの光榮の一面を知つてその受難の一面を解しなかつたからである、十字架上の死の眞義を未だ味ひ得なかつたからである、而してイエスを知つてその受難と死とを解せざるは未だ彼を知り盡した者ではなかつた、否彼の救主たる所以は即ちその死にあるのであるから之を解せずして彼をキリストと稱ふるも未だ眞理の核子に觸れないのである、カイザリヤピリビに於けるペテロの大告白も茲に至て順にその價値を減ぜざるを得なかつた、ペテロにして猶イエスの死を解する能はず、然らば彼の在世中之を知て貴き慰藉を献げたるは絶無でありし乎、
イエス、ベタニアの癩病人シモンの家に居給へる時或る婦蠟石の器物に價高き香膏を盛りてイエスの食する所に携來り其首に掛ぎ

しかば云々(馬太傳二十六章六節以下)、アトエハの言する通り、其時
 時は逾越節の前二日、人の子の十字架に釘けられん爲に付され給ふ
 べき時は目睫の間に迫つて居る、祭司の長と民の長老等とは詭計を
 以て彼を執へ殺さんと邸の庭に集り評議を凝して居る、彼の弟子の
 一人は今や銀三十の爲に彼を付さんとて好き機を窺ひ待つて居るの
 である、而してイエス御自身は悉く之を知り給うた、此苦き杯を父
 の聖旨ならば甘んじて受けなければならぬ、天國の福音を傳へ
 給うて三年、ユダヤの野にガリラヤの湖に彼の聖き姿は親しく影を
 印して、目あるものは見、耳あるものは聞きたるにも拘らず、一人
 の眞に彼を解するものなく、却て其比なき眞實と恩寵との故に世は
 彼を置くに堪えないのである、此時イエスの心に限なき寂寥なくし
 て何があらうか、素より父の賜と聖き慰藉は彼の胸を充して猶餘あ

りしとはいへ將に彼によつて救はれんとするその人類中の何人か
 一輪の花を以て彼の寂しき心を飾らざりしならば我等は深き憾に禁
 へざるを覺ゆるのであらう、幸にして茲に一人の婦が在つた、ヨハ
 ネの傳ふる處によれば其れはラザロ及びマルタの姉妹なるかのマリ
 アであるとの事である、嘗て其家に主を迎へし時姉マルタは待遇の
 事多くして徒に思ひみだれて居つたに反し獨り主の膝下に跪坐して
 熱心に福音を求めて居たかの婦であつた、
 マリアは善き業を選びたり、こは彼より奪ふべからず(路加傳十一
 章四十二節)
 と主の辯護し給ひしそのマリアであつた、聖書の記事のみに由つて
 見ても彼女は無口にしてさびしみを帯びたる婦である、恐らく彼女
 の心を占めて居たものは自己の罪に對する深き悔恨であつたらう、
 天國に對する強き希望であつたらう、心の貧しき者、哀む者、飢え

渴く如く義を慕ふ者、恐らくかゝる人が彼女であつたのであらう、
 而してイエスの受難と死とを解し得る者はかゝる人でなくてはなら
 ない、若しペテロが此處に躓きしとならば彼に代てイエスの死と復
 活とにいひがたき同情を寄せたる者はマリアであるべきである、果
 せるかな、彼女にペテロの雄辯はなかつたけれども又特別のふさは
 しき告白の途があつた、蠟石の器物に高價なる香膏、是を掛ぐは舊
 約時代以來の意味深き儀式である、然しいま之をイエスに掛ぎかけ
 て茲に全く新なる而も最も深き眞理が示された、この眞理だけはペ
 テロと雖も之を攫むことができなかった、カイザリヤビリビに於け
 るペテロの雄大なる告白には、晴を點したる完璧の眞理、イエス
 をその十字架の下より仰ぎ見て主よと呼ぶ眞の叫び、之を吐露した
 る者が使徒ならぬ癩病人の家に在りし卑しき一婦人であつた、而し

て憐むべし常時主の側を離れず日夕其教訓に親炙したる使徒等は却
 てその意味を讀むことができない、
 弟子等之を見て怒を含みいひけるは、此の喪費の事を爲すは何故
 ぞや、若し之を賣らば多くの金を得て貧しき者に施すを得ん(馬太
 八、九章)
 是正しく俗人の宗教観である、自ら碎けたる靈を有たずして妄に人
 を批評するもの、愚さよ、眞理の美はしさは彼等の眼の前には封ぜ
 られたる謎である、之を解き得ずして却て自己の低き立場より兎角
 の評語を放ち以て之を汚さむとす、憐むべきは彼等である。
 然しながらイエスは素より能く知り給うた、心貧しき婦マリアよ、
 汝は今我が爲に葬の儀式を爲すのである、二日の後の悲劇はたとへ
 未だ明瞭には汝の豫見する處たる能はずとも汝の貧しき心のうちに

何者か我が死に就き嘸きつゝあるは確である、汝の聖き愛はその聲に動かされてかくの如き表現を取つたのである、福なる者よ、汝い主人の子にかゝる同情を献ぐるが如くに天に於て汝の受くる報償はいとも大なるものがあるであらうと、イエスの感じ給ひし慰藉は深かつた、ペテロが與へたる失望の痕はマリアによつて癒されたのである、

イエス知りて彼等にいひけるは、何ぞ此婦を惱ますや、彼は我に善き事を行へるなり、貧しき者は常に汝等と共にあれど我は常に汝等と共に在らず、彼がこの香膏を我が體に掛ぎしは我の葬の爲に行せるなり、我誠に汝等に告げん、天の下いづくにても此福音の宣傳へらるゝ處には此婦の行したる事もその紀念の爲に言ひ傳へらるべし(同三十一節)、

イエスの福音は十字架の福音である、十字架上に顯はれたる驚くべき神の愛の福音、イエスの死に由て我等罪人の上に降りし絶大なる恩恵の福音、之を離れてイエスの福音はない、故に彼の死を解せずして彼を信ずることはできないのである、世の人素より解せず、弟子等すら猶之を解する能はざりし時、一人の弱きマリアありて臆氣ながらも彼の死を豫感し悲痛やるせなく黙せんとして黙するに忍びず、語らんとして語る能はず、遂に一壺の香膏を主の首に傾け盡して漸く其切實なる愛を表はすことができた、正にこれ美しき一篇の信仰詩、イエスは多分其の特愛のダビデの歌を詠む心地にて、否或はそれよりも一入深き感慨を以てこのベタニアの一夕を過し給うたであらう、十字架は今や近し、而して唯一人の之を解するものあり、彼の心の寂寥は癒されざるを得んや、寔に福なるはマリアである、

この名無き一婦人の織手によりて我等全人類の真心籠めたる花環が
 榮光の主の前に献げられたのである、かくて神の福音は智者達者に
 顯はれずして却て赤子に顯はれたのである(馬太傳五十二)、
 我誠に汝等に告げん、天の下何處にても此福音の宣傳へらるゝ處
 には此婦の行しゝ事もその紀念の爲に言ひ傳へらるべし。

イエスの神性

「それ神はその生み給へる獨子を賜ふほどに世を愛し給へり」

(約翰傳三章十六節)

イエスキリストは果して神の獨子であるかどうか、彼は生誕の時よ
 り既に聖靈に由て生れ給へりといふ、余は其の事實を信ずる、然し
 人あり若し精緻なる歴史の研究の結果を提げて余が目前にこの事實
 を否定せんか、斯の奇蹟的誕生に關する余が信仰は或は轉覆するか
 も知れない、パウロが羅馬書に於て彼をダビデの裔(男系)より出づ
 と明言せるが如きは現に余を悩ませる問題の一である、余は處女懐
 胎の一事のみを以てイエスの神性を立證することは勿論出來ない。
 彼は死して後復活し處々に於て幾度びもその弟子の前に顯はれ又

一時に數百の人々に姿を顯はし給うたといふ、余はこの事實を信ずる、イエスが復活體を以て、殊にその弟子等に再び遇ひ給ひし事實を信ずる、然しながら是亦奇蹟である、奇蹟は我れ自身の上に又はわが眼前にて行はれ自ら之を實見したるものでない以上萬一之を否定するの事實が發見せられたときに我は立つて争ふだけの根據がない、史上の奇蹟を信ずるの信仰を支ふるものは更に他になくてはならない、イエスの復活に關する聖書の記事のみが彼の神性に關する余の信仰の基礎とはならない。

彼は自ら神の子なりと稱し又常に父と相抱くの生活を爲し給うた、彼の一生を見るときは實に彼自身の言ひ給ひし如く人として生活するイエスが生き給うたのではなくして父がイエスに在りて此世に働きを爲し給うたのであることを認めざるを得ない、父を離れて暫ら

くもイエスはなかつた、之は驚くべき事實である、而も所謂奇蹟ではない、神の子たるの自覺が斯くも強大明瞭であつたといふことは彼の神性を證明する有力なる事實である、然しながら之亦それだけを以て動かすべからざる確證と見做すことはできない、彼の自覺そのものが誤でないといふことを證明するものが更に他になくてはならないのである。

彼は罪なき一生を送り給うた、パウロの所謂聖善の靈を以て生活し給うたのである(羅馬書一)、罪なき生涯、これ人の送り得ざる處である、何人も絶對に罪なき生涯を送り得たるものはないのみならず將來と雖も亦絶無であらう、罪の原理に關する學説は如何にもあれ、人類が悉くその中に囚へられて居るものなるの事實は否定するよしもない、又古來この事實を否定せんと試みたるものはない、故に若

し茲に全く罪より離絶したる一生を送りたる人があるならば彼は正しく人ではない、而してイエスはかゝる人であつたのである、即ち彼は人にして人にあらず、彼の神性を證明するにこれ以上の事實を持つて來ることにはできない、又この一事實がたしかである以上他に何の證據がなくとも彼の神性を證明するに十分である、然しながら茲に悲しきは罪に曇りたる我等の眼である、身自ら暗き罪の中にありて罪なき人を批判することは不可能である、何が罪であるか、そのことが明瞭にわからない、罪の罪たるは神の光に照されて初めて顯はるゝのである、神の側に立ちて罪を見て初めてその本體が明瞭にわかるのである、イエスの一生のうちには平和もあつた、戦闘もあつた、同情もあつた、叱責もあつた、否彼は決して所謂聖人君子の如き圓滿なる生涯を送り給はなかつた、彼の行の節々のみを見る

ときは彼は不孝者の如くにも見ゆる、不敬漢の如くにも見ゆる、狂人の如くにも見ゆる、亂臣賊子の如くにも見ゆる、現に彼はすべてかゝる汚名を衣せられて磔殺せられ給うたのであつた、彼の神性を認むる前に彼の生涯の罪なきことを證明せんとするは難中の難事である、否不可能である、彼を主と仰ぎ神の前に義とせられ聖靈の導きの下にある者にして初めてその事ができるのである。

然らば彼の神性は何に據りて之を確め得るのであらう乎、生誕の奇蹟必ずしも固守する能はず、復活の事實亦之を信仰の唯一の基礎となすことはできない、彼の自覺も彼を信じて初めてその真なるを知る、彼の生涯に罪なかりし事は最上の立證たるに相違なきも之亦その事自體が更に證明を要するのである、況んや彼をその弟子が何と見たか、聖書に何と明言してある乎といふが如きは直に執て以て

私の信仰の根據とするに足りない事はいふまでもない、果して然らばイエスキリストの神性は今尙疑問の裡に封ぜられて居るのである乎、抑も又之は各人の信仰に一任すべき主觀的事實に過ぎないのであらう乎。

否と答へざるを得ない、凡て以上の如き事實のほかには幸に唯一つ何としても疑ふことのできない火よりも瞭かなる確證を與へられて居る、それは何である乎と問ふならば見よと言ひて十字架を指すのである、其處に人は彼を釘けた、而して其處に彼は人の爲に祈り給うた、最大の敵意、而して至上の愛、彼の一生の同情に酬ゆるに人は殺戮を以てした、而して人の殺戮に酬ゆるに彼は猶且つ純の純なる愛を以てし給ふ、是に至てもはや人の彼に酬ゆべきものは盡きた、然り、主よと呼びて己のすべてを獻ぐるよりほかに今や彼

を遇ふべき途はないのである、この十字架上の愛のみは説明を要しない、萬人の胸に輝く大事實である、史上何人か斯る愛を抱くことを得たる乎、これは確に人の領分を超越して居る、斯愛を懐くことを得るものは之を人と呼ぶことはできない、而して之を知つて彼の一生を探るときは彼の人に對し給ふや常に斯愛であつたことを發見するのである、彼の三年の公生涯は十字架の愛の連続である、實に彼は終始十字架を負ひ給うたのであつた、彼の最後はその一生の縮圖である、模型である、我等は斯る愛の所有者に罪を想像することはない、彼が復活したと聞いて疑ふべくもない、彼が處女より聖靈に由て生れ給うたと聞いて之を打消すことはできない、而して彼が自ら神の子であるといふのである、いかにふさはしき事よ、彼が神の子でないならば我等はもはや神を見るの望みを抛つべきであ

る、然り彼ののみが神の子である、彼はたしかに神の獨子である、而して彼の此世に來り給ひしは最初より我等を救ふが爲であつたといふ、即ち神は我等を愛するの餘り其獨子を人として世に遣はし而も我等の罪の爲に殺戮せらるゝをも忍び給うたのである、神はかくまでに世を愛し給ふのである、實にその生み給へる獨子を賜ふほどに、而して其の確證は十字架に在る、我等の信仰と希望との根據は一に懸つて十字架に在るのである。

共働者イエス

今や人はみな重荷を負うて暮して居る、喘ぎながら人生の行路を辿つて居る、實に此世に多くの艱難がある、心配がある、失望がある、又難かき謎がある、吾等はいかゝる荷を負うてその重きに堪へがたきを感じるのである、勿論時に我を忘れて苦し紛れの氣焰を吐かぬでもない、雄大なる自然の懷に抱かれて心腸を一洗することもないではない、我を慰むるに歌あり、我を勵ますに友あり、家庭の和樂あり、事業の快味あり、而も凡て之等のものを以てして到底充すことの出来ない深い一要求があるではないか、見よ何人の唇に感謝の歌が湧いて居るか、何人の眸に希望の光が輝いて居るか、何人の頬に歡喜の色が溢れて居るか、何人の腕に死をも恐れない勇氣

が充ちて居るか、紳士とよ、彼等は社交に長けて居る、しかし眞の友を有たない、學者とよ、彼等は或は萬巻の書を涉獵したかも知れない、しかし眞個の眞理を知らない、實業家とよ、彼等は靈魂の糧に乏しき乞巧である、政治家とよ、彼等は政權の爲に賣られたる奴隷である、宗教家とよ、彼等は神と財とに兼ね仕へむとする二頭の怪物である、吾等は唯あちこちの勞働者即ち平民の中に僅かばかりの人らしき顔を見るのである、彼等は無用の虚榮心に惱まされない、生活問題もその低き生活と高き道念とに追付かない、彼等には世の政治家實業家學者輩に見ることの出来ない喜色がある、がしかし彼等にも實は苦勞の皺の伸びる暇とてはないのである、彼等に卑屈の相はない、しかし眞個の獨立と自由との氣象を見ることが出来ない、彼等に心配は少い、しかし絶對の平安はまだ其手に握つて居ない、

彼等もやはり勞する者重荷を負へる者である、その日に焼けたる臉にも屢々涙の露が宿るのである、その逞しき筋肉にも屢々倦怠の色が現はれるのである、噫吾等はみな鹿の溪水を慕ふよりも切に平安を慕うてやまない、勞働者と貴族と學者と政治家と、否全人類の背に負はされたる重荷を取り去つてその渴ける心に歡喜の泉を充すべきものは果して誰である乎。

凡て勞れたる者また重きを負へる者は吾に來れ、我汝等を息ません(馬太傳二十八節)

喜べ樂め、汝の萎えたる手を強くし弱りたる膝を健にせよ、明白なる福音は吾等の耳朶を打ちつゝあるのである、その聲に世の常の生温き響はない、絶對的である、無條件である、而も最も個人的である、往け救の途は彼方に在りではない、來れ、我に來れである、指

圖ではない、招待である、親友を呼ぶ言葉である、之よりも柔しき
 聲を聞くことは出来ない、「我れ汝等を息ません」といふ、「我れ汝等に
 息みを與へんではない、我自身汝等の息みとならんである、我自身
 を息みとして汝等に與へんである、驚くべきかな、吾等は未だ嘗て
 かゝる申出を受けたことはない、それは餘に嘘らしくある、何となれ
 ば若しこの約束が真であるならば、我とは勿論人以上のものでなくて
 はならない、而もその貴き身を贈物として敢て我等如きものに提供
 せんとは果して眞實であらう乎、吾等はかゝる逆説を信ずるに躊躇
 するのである、しかしながら彼は又いふ、
 我は柔和にして心の謙遜なる者なり(同二十)、
 偉大なる者は我なりとはいはない、「高潔なる者は我なり」とはいはな
 い、「柔和にして謙遜なる者は我なり」と、然り之れ實に彼の名である、

之よりもふさはしき名を彼に附することは出来ない。
 見よ、學者、パリサイの徒、政治家、軍人の恐れし彼に憚らず近
 づきて満腔の敬愛を献げたる者の多數は婦人であつたではないか、
 姦淫を爲せる女の捕へられて彼の許に來りし時の彼の裁判は如何で
 あつたか、己を敵に渡さんが爲に裏切らんとせる弟子を彼は如何に
 遇ひ給ひしか、兵卒及下吏ども炬と劍とを携へて彼に迫りし時如何
 にして捕はれ給ひしか、唾せられ鞭うたれ棘の梟と紫の袍とを被せ
 られあらゆる嘲弄侮辱を受け給ひし時の彼の態度はどうであつたか、
 而して終には十字架に附けられて却て敵の爲にその罪の赦されんこ
 とを祈り給ふ、是實に柔和の中の柔和であつて吾等の怪しとする處
 である、其處に微塵も自己の主張を見ることが出来ない、無限の信
 頼絶對の歸依とはこの事である、蓋し柔和とは己の力を殺して神の

力の發現を俟つことである、一切を神の御手に委せ奉るが故に己の手を擧ぐるを要せざることである、イエスの此世に來り給ひしは神の聖旨を成らしめんが爲に外ならなかつた、故に彼は最初よりして信頼の人、歸依の人であつた、彼の柔和は即ち神の聖旨の進むべき軌道であつた、吾等はイエスの柔和に信仰の典型を認むるのである、吾等は柔和の人、イエスに人の子—神に酔へる人の子を見るのである、柔和とは畢竟人の神に對する絶対の信頼に外ならぬのである、イエスは又神の子であつた、彼の神格は彼の罪無き生涯の證明する處である、彼は天に於て神と共に在つた、人類にして若しかくまでに墮落せざりしならば彼はその國を棄て、此世に降臨するに及ばなかつたのである、然しながら人の罪を救はんが爲に神は遂にその獨子を送り給うた、神の子は人として此世に降り立つた、而も王侯

の宮殿にあらず、天下の首都に非ずして、ユダヤの片隅である、大工の家庭である、馬槽の中である、何たる謙遜！更にその地上の一生を見よ、税吏及娼妓の友、癩病人に親み、弟子の足を洗ひ、遂に十字架を負うて雪よりも白き身に世の罪を悉く引き受け給ふ、神の子が人として生るゝ既に驚くべき謙遜であるのに、人として死するに至つては餘りに極端であるといはねばならぬ、しかしながら是れ實に己むを得ぬことであつた、彼は最初よりして世の罪を負ふ羔である、親が子の苦を自分のものとして苦むが如く神が人の罪を自ら犯せしものとして處分し給ふのである、神たるの榮光を棄て、人たるの耻辱を甘受し給ふ、神の獨子たるの幸福を棄て、罪人の贖主たるの不幸を撰び給ふ、「夫れ神はその獨子を賜ふほどに世を愛し給へり、吾等はイエスの謙遜に恩寵の結晶を見るのである、吾等は謙遜

の人イエスに人類の神の子を認むるのである、謙遜とは畢竟神の人類に對する切々の同情に外ならぬのである。

この柔和にして謙遜なるイエスキリストは今現に吾等と共に在り給ふ、吾等は彼の姿を認むることは出来ない、しかし彼の靈の力を切實に感ずることが出来る、彼の呼び聲をさやかに聞くことが出来る、彼は今も尙萬人に向て呼び給ふのである、來れ、我れ汝等を息ませんと、而して心の貧しき者は最も敏くこの聲を聞きつける、羔よりも柔和なる彼の招きを受けて吾等は何を措いても彼に往かざるを得ない、限無き親みを感じて急ぎ起て彼に往かざるを得ない、我が軛を負うて我に學へ、汝等心に平安を獲べしと(同)即ち謙遜なる彼は吾等の共働者となり給ふのである、吾等と同じ軛を共に負ひ給ふのである、世の罪を自己の双肩に負ひ給ひし彼は今も尙ほ吾等の

重荷の凡てを引き受け給ふのである、而して吾等は唯彼の軛として之を負ひ彼が絶對の信頼を以て父に委せ給ひし如くに凡てを彼に委せて安ずればよいとのことである、彼の異常なる謙遜によつて憚らずして彼を共働者と呼び吾等の重荷を彼の肩にうち懸け而して彼の柔和に學び彼の如く神に信頼すればよいとのことである、即ち彼を共働者とするに依つて凡ての重荷に打勝ち且神に頼れる深き平安を味ふことが出来るのである、彼自身がわが息みとなるのである、彼を措いてかゝる共働者はない、唯彼のみは朝より夕まで昨日も今日も永遠までも變らず我と共に同じ軛の下に在る、而して我れ疲るゝ時に我が爲に歌ひ、我れ躓く時に我を起し、我れ前途を見失ふとき我が希望の光を與ふ、我れ死の海に出でんとする時も尙我を離れず我が水先案内となりて神の國まで我を導いてくれるのである、實に彼

と共に在て我は暫らくも神を忘るゝことは出来ぬ、彼と共に在て彼の如く神と語らざるを得ない、彼あるが故に神の愛は常にわが心を涵し神の平安はわが胸に漲るのである、噫親しき共働者イエス、彼はわが凡てである、我に賜ひし神の恩恵の凡てである、世の勞働者よ、彼を友として汝の額の皺を平かにせよ、學者、貴族、政治家、宗教家、否な凡て勞れたる又重きを負へる者よ、往て彼を友とせよ、然らば初めて汝等の深き要求は充されるであらう。

教理と信仰

ナザレのイエスの説きたる基督教の教理は何である乎、詮じ詰むれば唯神の愛である、而して是はイエスが説きたるが故に真理であるのではない、何人が説きたりとも神の愛は永久の真理である、釋迦も之を説いた、佛教の教義亦詮ずる處之に外ならぬ、この真理を明にするが爲の説き方には色々あつたかも知れぬ、皮膚の色は異つて居たかも知れぬがしかし骨は同一である、その教理より見て基督教と佛教とは必ずしも別物ではない、神の愛は凡ての宗教の歸する處である、磁石が北極を指すやうに宗教といふ宗教は皆この真理を指して居るのである。

然らば何故獨り基督教のみが余を救うて其他の宗教は余を救ふこ

とが出来ないのである乎。
 余は素と佛敎に負ふ處甚だ多い、殊に我國の親鸞上人の稱へたる
 眞宗の如きは其單純にして深奥なる教理が強く余の心を引きつける
 のである、その唯聖名の奉唱即ち信仰のみによりて救はるといふ思
 想や罪人ほど一層深く如來に愛せられるといふ信念の如きは之を余
 の手に握り占め余の胸に抱き占めたく欲ふのである、現に余は幾度
 び佛敎の敎によつて慰安を獲たかも知れない、余の失望せる心に向
 つて親鸞上人の手より温き同情を投ぜられたる事は決して少くない、
 それにも拘らず佛敎は遂に余の力となることは出来なかつた、彼は
 光明の所在を示してくれたけれども其處に達すべき途を教へてくれ
 なかつた、彼は余の心に高き理想を抱かしたけれども余の全心に
 大革命を起し奮きは去て皆新しく成らしむるの力は無かつた、余を

して余の所有物を悉く棄て去り赤裸々となつて唯神の愛にのみ頼ら
 しむる力は無かつた、痛切なる或は強大なる誘惑の襲撃に對して泰
 然としてサタンよ退け主たる神を拜し唯之にのみ仕ふべしと言はし
 むるの力は無かつた、況や死の手が今や余を拉し去らんとする時に
 あゝ日没、明星見ゆ
 我を喚ぶ聲のあざやかさ

大潮は遠く我を運ばんも
 我一度砂洲を過ぎなば
 我が水先案内を面の當に見む(テニスンの上氏譯による)
 と歌はしむるだけの力がないことは明である、寔に余は佛敎の招き
 に應じ余の傷手を裏んで彼に赴くも彼は安からざるに安しと宣言す

るのである、彼の言葉は甘く且清い、しかし彼の手は余の五尺の體を支ふるに足りない、彼は平常無事の日に於て或は余の友らしく見ゆるかも知れない、しかし余の心の顛倒せんとする時に余の杖たるの用を無さない、之を要するに佛教の提供するものは陰影であつて實體ではない、救の宣言であつて救の綱ではない、彼に頼つて救に入らんと欲するも遂に失望に終るの他なきは洵に已むを得ないのである。

蓋し信仰は信念ではないのである、信仰は信頼である、倚頼である、神を信ずるとは單に神は愛なりと思惟することではない、自己の身體財産は素より心靈までをも賭して神の愛にうち頼るのである、自分といふ自分を一切投げ出して委せするのである、萬一間違つたとするならば實に永久取り返しのかざる最大の冒険である、何

人がこの冒険の保證をする乎、宗教家の説教や預言者の預言では逆もこの重大なる保険に値しないのである、況んや一教一派の教理の如きは空虚の響である、之に自己を托するは氷に火を托するよりも危険である、我等に對して神の愛の保證をするものは又それ自身神に等しき信用を有するものでなくてはならない、而も我等と同じ血と肉とを備へ我等の眼を以て見手を以て觸れ得べき生きたる人格者でなくてはならない、人にして罪なき者、神にして肉を備へたる者、若しかゝる者が世に在てその行を以て神の愛を保證してくるゝならば我等は安んじて信頼することが出来るであらう、若しかゝる者が我等の罪の爲にその生命までも犠牲にしてくれるならば我等は最早神を疑はんと欲するも能はない、若しかゝる者が神の獨子であつて神が我等を愛し給ふの餘りその獨子を我等に賜うたのであるとし

たならば我等は今や彼自身を我等の主と仰ぎ自ら彼の僕となつて一切を彼に委せ唯彼の命のまゝに服従することが出来るのである、彼の靈を我等の靈の裏に迎へ彼をして我を征服し支配せしめ我に死して彼に生くことが出来るのである、我の力なるものを悉く棄て去り彼の力をそのまゝに我ものとすることが出来るのである、従て彼と共に神に向ひアバ父よと呼びかゝることが出来るのである、彼を伴侶としてあらゆる誘惑に打勝つことが出来るのである、彼を水先案内として死の瀬戸をも勇しく打ち超ゆることが出来るのである、之即ち信仰である、この偉大なる伴侶の力強き水先案内がなくして何人が神の愛を疾呼するとも余は到底信ずることが出来ない。噫この伴侶この水先案内は何人ぞや、神の子は果して何人ぞや、ナザレのイエスこそはその人ではない乎、我等と同じ肉を享て而も

罪を犯ししことなく十字架に釘けられて猶人を愛し死して後甦りしイエスキリストこそは紛ふかたなき神の子ではない乎、彼に倚頼み彼の肉を食ひ彼の血を吸うて初めて永生は我等に臨み神の愛は我等のものとなるのである、救の途は唯イエスキリストのみあるのである、彼あるが故に救はるのである、基督教の教理必ずしも優秀なるに非ず、イエスの教は必ずしも釋迦の教に勝らない、問題は唯イエスその人を受くるか否かにある、彼を抜きにしたる佛教其他の宗教が余を救ふ能はざるは少しも怪しむに足りない、故に又假令基督者と稱するもイエスの教を聞たばかりで彼と一にならざるものは到底神の愛を我ものとすることは出来ない、唯全く彼と結び付いて初めて我等は磐の上立ちしが如く安全なることを得るのである、馬太傳七章二十四節以下は即ちこの事を教ふるものに過ぎない、

是故に凡て我がこの言を聞て行ふ者を磐の上に家を建てたる智き人に譬へん、雨降り大水出で風吹きて其家を撞てども倒るゝことなし、是れ磐を基礎と爲したればなり、凡て我この言を聞て行はざる者を沙の上に家を建てたる愚なる人に譬へん、雨ふり大水出で風吹きて其家を撞てば終には倒れて其傾覆大なり

「我言を聞て行ふ者行はざる者」とあるその「行ふ」といふ字は原語にて或は「獲得する」「創造する」「守る」等の意義を有する語である、此處に記されたるも畢竟イエスその人を我ものに作る或は「奮き自己を彼と共に十字架に附けて新しき自己を創造する」或は「彼を主と仰ぎ彼の僕となりて絶對的に彼の命令に服従する」等の意義を寓するのであつてつまりイエスその人に對する信仰を意味するに外ならぬ、彼自身が眞理であるから彼の言を行ふとは即ち彼自身を身に體することである。

新生と希望

子たる者の自由

我キリストと偕に十字架に釘けられたり(加拉太書二章二十節)十字架に釘けられたものは獨りナザレのイエスのみではない、我も亦彼と共に十字架に釘けられて居る、我は如何にして十字架に上りしか、そのことは知らない、しかしながら十字架上のイエスキリストを仰ぎ見し時に、彼が何の爲に十字架に釘けられ給ひしかをばつきりと解し得た時に、その時我も亦彼と偕に既に十字架の上につけられて居ることを發見したのである、今やわが奮き野心も感情も財産も勢力も皆彼處に釘けられて居る、昔讚美の眼を以て見しもの、

憧憬の心を注ぎしもの樂みしもの誇りしものは皆無残にも釘の下に打ちつけられて居る、今や我は一世の雄となつて天下を風靡せむとの野心を有たない、今や巧に社會の風潮と推移しつゝその改善を圖るが如き眞似を爲すことは出來ない、今や隣人と共に躍り狂ふことは出來ない、凡そ此世限りのものに興味と尊敬とを有つことは出來ない、安樂なる生涯や所謂幅の利く境遇は我がものではない、それ故昔我に對して多少の望を囑せしものは皆失望の聲を發するのである、彼等はその心中に獨語していふ實に惜しいことであると、彼等の或ものは今も尙我を呼び戻さんと試みつゝある、殊に純なる愛の心より我に様々の期待をかけし者は今や深き痛みを胸に壓へて居る、どうかして今一度舊の我に歸さむとは彼等の切なる願である、而してその事の遂に不可能なるを知つて彼等は失望の餘り叫ぶであらう

彼は既に死したのであると、然り實にそうである、我は既に死したのである、十字架上にイエスキリストと共に死したのである、嘗て世の人の心に或ものとして認められたる我は今は彼處に釘けられて居るのである、我は再び十字架より降ることは出來ない、我はかゝる姿のまゝで世より全く葬り去られんことを欲するのである、而して此の如く我を葬り去ることは我を愛する者に取つて深き悲みである、彼等は唯失望の歎きのみを以て我を送るのである、その愛より出づる涙を見て我も亦心動かざるを得ない、我も亦之が爲に泣かざるを得ない、さりながら我は果して唯涙を以て送らるべきであらうか、彼等の愛する者が十字架につけられしことは果して彼等の心より何かを奪つたのであらうか、舊き我の死したることは果して悲むべきことである乎。

最早我生けるに非ず、キリスト我に在りて生けるなり(同節)
 舊き我は死した、故に最早我生くるのではない、それにも拘らず
 我は生きて居る、新しき我は立派に生きて居る、是即ち我ではない、
 我はキリストと共に既に十字架上に死した、しかし彼は死さない、
 彼は復活し給うたのである、而して彼が亦死したる我を復活せしめ
 給うたのである、勿論舊き我を再び生かし給うたのではない、茲に
 全く新なる誕生が行はれた、新しき我が造られたのである、新しき
 我とは何ぞ、我が眼わが口は依然として舊のまゝであるかも知れな
 い、しかしながら我が内心に昔見ざりしものがある、我が内心に主
 人が坐つて居る、彼が今や絶対の権能を以て我を支配して居る、我
 が物言ふは彼が言ふのである、我が事を行ふは彼が行ふのである、
 我が生命の凡ては彼より出づるのである、故に新しき私の價値は彼

の何人なるかに依りて定まるのである、而して彼は即ち神の子イエス
 キリストである、彼は自己の生命を中心として新しき我を造り給う
 たのである、彼を唯一の主人として又無二の親友として心の奥に迎
 へしものが新しき我である。
 舊き我と新しき我との間にこの外別に變りはない、しかし心の奥
 に彼を迎へたといふ此の一事は我なるものを全然別のものにして終
 つたのである、天地の間に於ける私の地位を一變して終つたのであ
 る、實にその相違は根本的であつて何物の變化も之に比ぶることは
 出来ない。
 汝等既に子たることを得しが故に神その子の靈を汝等の心に遣り
 アバ父と呼ばしむ(同四章六節)
 彼即ち神の子を心の奥に迎へてより唯一つ從來になき經驗を有つ

たのである、「アバ父！かくいひて神に縋るを得ることが其である、
 舊き我にこの事だけは出来なかつた、社會に勢力を占むることは出
 來たかも知れない、有益なる事業を爲し遂ぐることは出来たかも知
 れない、しかしながら唯此一事だけは不可能であつた、勿論舊き我
 も幾度かこの事を欲した、父なる神を見むことを欲した、が遂に不
 可能であつた、「父よの呼び聲を心の底より發することは遂に不可
 能であつた、今は又わが能力も勢力も十字架につけられた、その代り
 に見よ、我は滿心の渴仰を以て父よと叫ぶことが出来るのである、
 歡喜に充ちた時にもかく呼ぶのである、失望に沈んだ時にもかく呼
 ぶのである、我はこの聲がわが心の那邊より出づるかを知らない、
 多分心の奥にゐますわが親しき主より出づるのであらう、それに相
 違ない、何となれば彼を迎へて初めてこの事が出来るやうになつた

からである、彼の靈が我をしてかく叫ばしむるに相違ないのである、
 而して彼は即ち神の子なるが故に彼の靈を迎へて我も亦子たるの資
 格を得しとはいかにも然もあるべきことではないか、然りかくして
 我は現實に子たるの資格を獲得したのである、神に子とせらる(或は
 義とせらる)とは單に子なりとの宣告を受くるのみではない、子たる
 の實力を與へられずして子とせらるゝことは出来ない、而して父よ
 と呼び子よと呼び交すその混りなき愛が現實に成立して茲に初めて
 神に子とせられ即ち義とせられたのである、之が出来るまでは我は
 何でありしとも子ではなかつた、之が出来てからは我は何でなから
 うとも神の子たることだけは確實である、子と名づけられて子とな
 つたのではない、子たるの實力を與へられたるが故に子たらざるを
 得ないのである。

是故に汝はもはや僕にあらず子なり。汝等神を識らざりし時は、其實神に非ざる者に事へて僕たりき(八節七)。子となる迄の我は何であつたか、その元氣は盛にその野心は強くその勢力は大であつたにもせよ、要するに一個の僕に過ぎなかつた、名利を獲て名利に囚はれ人を傾使して實は人に事へ罪と死とに翻弄せられ多くの朽つべきものゝ爲に我が心は八方より抑へられて居たのである、此方に好からんとすれば彼方に悪く右に伸びんとすれば左に屈し、矛盾又矛盾、彌縫又彌縫、内心の空虚充すに由なく僅に不徹底なる慰安を漁りてはかなき其日ぐらしを續けて居たのである、噫是實に現下世界幾億の人々の飾らざる内的消息ではないか、かの自信あるらしき學者政治家事業家の心事も畢竟茲を出不いではないか、かか、之はこれ神を識らざるものにとつて當然の途行である、未だイ

エスキリストを心に迎へざる者にして獨り此事を秘せんとするは無益である、子たらざる者の身分は僕たるより外ないのである、舊き我は實にこの世の奴隷たるを免れなかつたのである。然るにキリストを迎へて我は釋放せられた、彼は奴隷たる我を贖うて子たる身分を附與してくれた、彼は舊き我を十字架につけて凡て我心を縛りし虚榮や情慾や情實を蹂躪して終つた、而して自ら代つて新しき我の主となつたのである、我は即ち此世の奴隷より脱れてキリストの僕となつたのである、キリストの僕は奴隷ではない、子である、彼が我等の主たるは世の常の主人の如きではない、限無き愛の主である、故に又友である、新郎である、彼の如き新郎を得て我は凡て今までの慾望を抛たざるを得ない、彼の如き友を得て我はあらゆる恐れを棄てざるを得ない、彼と共に在て此世の光輝は我

眼を眩せんとするも能はない、彼の聲を耳にして社會の喧騒は我が注意を奪はんとするも能はない、彼に手を執られて死も我を却すに足りない、彼を主と仰ぐことを得て舊き我を十字架の上に曝すことは更に惜くないのである、彼を迎へて尙且奴隸の軛に繋がることは不可能である。

イエスキリスト我等を釋きて自由を得させたり、是故に汝等堅く立ちて復び奴隸の軛に繋がるなかれ(同五章一節)

否唯に奴隸の軛より我等を釋き放ちたるばかりではない、彼は今や我が内心に常住して刻々に我を導き給ふのである、彼に導かれて我も亦子たる者の靈を有つことが出来た、かくて我も亦彼と均しく神の世嗣となつたのである、神の國を承継すべき者は我等である、否彼と結び付いて既に我等は神の國を嗣いだのである、既に天國の

市民となつたのである、勿論この國に在りて我等は獨り自ら歩み得るのではない、歩一步彼は我が手を執つて進む、彼の赴く所に我は赴く、嘗て幾度か到達せんことを企て、遂に失敗したるいと高き或はいと深き所へも彼に導かれて今は到り着くことを得るのである、是我が行くのではない、彼が連れ行くのである、彼と共に歩みて我足は自然に前に進む、荆棘も我を妨ぐる能はず、雲霧も我を遮る能はず、彼の足跡を印する所に我も亦足跡を印する、而して彼の道は愛である、故に我も亦愛の道を辿らざるを得ない、かくして彼と共にその高峯に攀ち登りて美しき峯々の眺望を恣にせざるを得ない、靈の結ぶ所の果は仁愛、喜樂、平和、忍耐、慈悲、良善、忠信、溫柔、樽節(同二十二節)

と、かゝる多くの賜は求めずして自ら我ものとなるのである、實に

彼を友として以來人生の味は一變するを感じた、罪は自ら我心より離れ愛と義とは徐々にわが性格となりつゝある、不思議なる手がわが胸の中の雑草を取り除きて美き種を植えつゝあるのである、是即ち垂めである、而して子たる者の自由とは畢竟この不思議なる聖めに外ならぬのである。

今より後誰も我を操すなかれ、そは我れ身にイエスの印記を佩びたればなり(同七六章)

然り、我は身にイエスキリストの印記を佩ぶるのである、我は彼と共に十字架につけられ、彼によつて義とせられ、彼によつて聖められつゝあるのである、即ち我が全身が彼の印記である、その限無き光榮を憶うて感謝の涙に咽ばざるを得ないのである。

活ける水

イエスはいまガラヤ指して旅し給ふ途上である、途は日頃ユダヤ人と互に蔑視して交際をなさざるサムリアにかゝつた、兎ある小邑のほとりに辿り着き給ひし頃は早や日も高く晝の十二時頃であつた、路傍に見ゆるは由緒も深きヤコブの井である、水に不自由なるユダヤの曠野を歩み給ふこと既に半日、身は相應に疲倦を催し喉は少からず渴いて居る、イエスは坐し給うた、簡單なる晝食を備へんとて弟子たちは邑に立ち去つた、引きかへに現はれ來りしは水瓶を小脇に抱へしサムリアの婦である、井の傍に見識らぬユダヤ人の躡居せるを見て小うるさしと思ひけむ、されど何氣無き素振にて汲器を下げた、その時イエスは徐ろに口を開きて我に飲ませよと要め

給ふ、婦は意外なる面持である、^{「汝はユダヤ人にして何ぞサマリヤの婦なる我に飲むことを求むるや、彼女は怪まざるを得なかつた、然しイエスは答へ給うた、}

汝若し神の賜と我に飲ませよといふ者の誰なるを知らば汝我に求めむ、さらば活ける水を汝に與ふべし、

ユダヤ人なりとて怪むなかれ、汝若しかく言ふ者の何人なりやを知らば我いま汝に水を求むる如く汝も亦我に求めむ、然らば井の水ならぬ活ける水を與ふべしと、婦の怪訝は一入募つた、汲器なく井も亦深きに活ける水とは何處より汲みしものなるべき、抑もかゝる不思議を語る斯人は果して誰ぞやと、しかしイエスは猶も續け給ふ、^{凡て此水を飲む者はまた渴かん、されど}

我與ふる水を飲む者は永遠に渴く事なし、且わが與ふる水は其中

にて泉となり湧き出で、永生に至るべし

井の傍にて水の話である、ユダヤ人がサマリヤの婦に言ふとはとの怪訝に對して、^{我の誰なるを知らばといひ給ふのである、話題は極めて自然的である、茲に一杯の水を求むるの序に深遠なる真理を語り給ふと氣付かざるは獨りサマリヤの婦のみではあるまい、然し我等は見落してはならない、日常平凡の事例を以て神の真理を説明し給ふはイエスの常の筆法である、彼は今人類の救拯に就て語り給ふのである、神の愛と信仰とに就て語り給ふのである、パウロの言葉にて義と聖と贖とに就て語り給ふのである、然りこの簡單なる井端の立話の裡に限なく深き真理がある、基督教の奥義がそこに籠つて居るのである。}

「汝若し神の賜と我の誰なるを知らば」

神の賜とは何である乎、順き境遇か、幸福なる家庭か、智識か、徳義か、或は又親しき友人である乎、否神はかゝるものを我等に賜ふ前に驚くべく貴き賜をたまうたのである、然し我等は唯神の賜の何である乎を胸に思ひ浮べて見るだけでは遂に之を發見することができない、我等は出でて捜さなければならぬ、遠くパレスチナの一角、獨體山上に辿りて其處に立ちたる十字架を仰ぎ見なければ分らない、之を仰ぎ見るときに我等は恰も畑に藏れたる寶を發見したるが如くに驚きと悦びとに打たるのである、その十字架の上に釘けられたる罪なき囚人、終まで世を愛し、愛したるが爲に却て死を以て酬むられ、而も猶且世の爲に祈り給ふ、彼は神の獨子でなくてはならない、果して然らば神は我等にその愛を知らしめんが爲に獨子をさへも賜うたのである、之はこれ驚くべき賜ではない乎、十

字架に釘けられたる神の獨子、彼を仰ぎ見て我等は叫ばざるを得ない、之である、之である、神の心づくしの賜は之である。彼の首はうな垂れて居る、その頭には棘の冠がある、然し彼を熟視して我等は知る、この神の獨子こそは二年の昔サマリアの野なるヤコブの井の傍にて水汲みに來れる婦と語り給ひしかのユダヤの旅人なることを、我に飲ませよと求め給ひしイエスその人なることを、さては神の貴き賜は即ち彼自身にてありしか、世を救はん爲に來り給ひし神の獨子は彼にてありしか、宜なり、汝若し神の賜と我に飲ませよといふ者の誰なるを知らば汝我に求めむと、然し彼が神の獨子にて在し給ふならば我等は彼を信じ彼に求めざるを得ない、願はくは罪と死より救ひ給へと、かくして我等は弱き自己をこのまゝ彼に引渡すのである。

「さらば活ける水を汝に與ふべし」
 活ける水とは不思議なる言葉である、かゝる言を初めて聞きしサ
 マリアの婦が汝何處より汲みて其活ける水を有てるかと怪しみたる
 も無理ではない、然し之は汲器にて汲み取る物質の水でないことは
 明である、何となれば之を飲む者は永遠に渴くことなしとあるか
 らである、然らば或は愛とか正義とか真理とかいふ精神上の徳性又
 は智識の類であらうか、或は幸福とか安心とかいふ境遇又は感情の
 類であらうか、神の獨子の我等に賜ふものと聞いて神の賜に就て
 懐きしと同じやうなる疑問を再び繰返すのである、然し是亦腦裏の
 想像をいかほど巡らしたればとて解することはできない、活ける水
 の何たるかは十字架架上のイエスに自己を引き渡したる者にして初め
 て之を實驗することができ、之は口以て説く能はず眼以て見る能

はず、唯靈を以てのみ之を解し得る、然りイエスの前に献げられた
 る砕けたる靈のみがよく之を解するのである。
 活ける水は勿論物質ではない、然りながら又單に徳性や智識では
 ない、境遇でも感情でもない、活ける水は即ち活ける者である、人
 格者である、彼は常に我等と共に在りて我等を導き且慰むる友であ
 る(約五章二十四節十六、二十六節)、凡の事につき信頼すべき唯一の伴侶で
 ある、彼を友として我等は衷なる罪にうち勝ち又外なる世にうち勝
 つのである、然し彼は人ではない、彼に肉體はない、彼は靈である
 (七章二十九節、十)、真理の靈である、父より出でたる真理の靈であつて
 イエスの爲に證をなし又凡ての真理を我等に知らしむるものである
 (十、十四章十七節十五、二)、彼に導かれて我等はイエスの兄弟となり神を
 父と呼ぶことができるのである(十、四、十五節)、即ち彼は子たる者の靈

であつて彼を受けたる者のみが神の子と呼ばるゝのである、然り彼は子たる者の靈である、神の獨子たるイエスキリストの靈である、キリスト今はこの靈として存在し給ふ、故に亦彼を信する者の靈の裏に來りて自ら宿り給ふのである、かくして我等は彼と共に神の子たるの地位を獲得する、神の獨子たるイエスを信じ彼を主と仰ぐと、きに彼の靈が我に臨みて茲に全く新なる生活が始まるのである、活ける水を受くるとは即ちそのことに外ならない。

「我與ふる水を飲む者は永遠に渴くことなし」

この靈一度び我等に臨むや窮なく我等と共に在るのである(約翰傳 十四章 節十六)我等はもはや暫らくも孤獨であることはできない、暫らくも彼の導きと慰めとより離るゝことはできない、若し過つて彼を離るゝときは彼は直に來りて我を取り戻すのである、故に彼を受けたる者

はたとへ過つて罪を犯すとも又直に彼に立ち歸るのである、かくして我等は再び罪の轡を負ひてその奴隷となることはない、罪は尙我等を離れ切らざるも最早我等の主人ではない、主人は活ける水なる聖靈である、彼は即ち眞理の靈であるから彼と共に在りて眞理に渴く、彼の憂はない、彼は又慰むる者であるから彼を伴侶として同情に渴く、彼の虞はない、彼の慰藉と指導との下に我等は日々に平康と聖潔とを獲て行くのである。

「且わが與ふる水は其中にて泉となり湧き出で、永生に至るべし、」

それのみではない、この與へられたる水がいつまでも我等の中に在るのみならず、それが一つの泉となりて更に新なる水が湧き出づるといふのである、我等の中に宿りし靈が常に我等と共に在るのみならずその中より更に新なる生命が生まれ出づるといふのである、實

に彼を胸に懐きてより從來識らざりし貴き力が限なく溢れ來りて我等の地上に於ける生活が益々豊贍なるものとなり行くは勿論であるが最後に此の朽つべき肉體が朽ちて終ふ時に永久に朽ちざる完全なる生命が新に彼より賦與せらるるのである、此生命は全く疵なく汚なきものであつてキリストの榮に似たる榮光の生命である、其時罪は最早痕跡をも留めずなり唯聖き愛を以て充實するのである、我等は勿論生れながらにして斯る貴き生命を獲得すべき資格も能力も有たない、我等は自己にのみ頼るときは遂に死して朽ち果つるの外はない、然しながら唯イエスの何人なるかを知り彼に頼りて彼より活ける水即ち聖靈を受くるときは聖靈そのものが泉となりて此の貴き永世を我等の衷に湧き出でしむるのである、即ち之は全然彼の賜である、我等に與へらるゝ最大にして最後の恩寵である。

此の如きが所謂活ける水である、疲れたる身を暫し路傍に休ませ一杯の水に喉を潤さんとするに當り端なくもこの深遠なる福音を初見の一サマリア婦人に傳へ給ふ、驚くべきはイエスなるかな、婦人は尙其意味を汲み取り兼ねしも遂に水瓶を遺して邑に行き人々に來りてキリストを觀よといひ觸れしといへば恐らく神の賜と我に飲ませよといひし人の誰なるを少しく解し得たのであらう、曩にはユダヤ人の幸にてパリサイの學者なるニコデモ彼に來り懇に教へらるゝも遂に覺らず、如何で此事あらんやといひて去りしに、今は名も無きサマリアの一人、而も嘗て五人の夫を有ち現に夫ならざる者と共に在るの罪人、井端に立ちて語を交すこと三言五言にして遂にイエスの神の子なるを知り驚きと悦びとの餘り之を人々に傳へんとて蒼皇走り去る、寔に福なるは智者達者に非ずして赤子の心

をもてる罪人である、神の賜とイエスの何人なるとはかゝる人に
 願はれて驚くべき活ける水が與へらるゝのである、かくて二千年前
 サマリヤの野に於ける一場の水問答は我等の爲に限無き福音を遺し
 たのであつた。(四約論傳)

來世の希望

我が行先は何處である乎、我は之を知らない、之を隣人に問へば
 皆指さしていふ、彼處である、彼處にて永き眠が我等を待つのであ
 ると、その指さす處は即ち墓である、嗚呼果して然る乎。
 若し隣人の言をして真ならしめよ、人生五七十年決して長しとい
 ふことはできない、而してその間に在て我等の求むべきものは何で
 あるか、分らない、何を求むるとも僅に墓までの間、而してその入
 口にて凡てを投げ出さなければならぬならば畢竟これ空である、然
 りその時は我等も亦傳道之書の記者と共に空の空、空の空なる哉都
 て空なりと叫ばざるを得ない、智識の探究？哲學の奥義を究め人生
 の目的を探りてよし我はわが智囊の重きに小さやかなる誇りを感じず

とも歸する處自己の行先の墓に過ぎざるを確むるのみならば智識は寧ろ詛ふべき憂患ではない乎、
 我れ心を盡し智慧を用ゐて天が下に行はるゝ諸の事を尋ね且つ考覆べたり：我れ心の中に語りて言ふ、嗚呼我は大なる者となれり、我れより先にエルサレムに居りし凡ての者よりも我れは多くの智慧を得たり、我心は智慧と知識を多く得たり、……それ智慧多ければ憤激多し、知識を増す者は憂患を増す (傳道書一六章十節)
 智識求むるに足らず、さらば逸樂か、然り是れ現代最大多數人の求むる處である、否單に現代のみといはない、「我等飲み且躍らう、明日死ぬかも知れぬから」と古人が既に言て居る、寔に現世を終局と見て逸樂以外のものを求むるは愚である、墓を界として萬事休するならば靈性の向上畢竟何物ぞ、社會の改良畢竟何物ぞ、道德とよ、そ

れは享樂の爲の方便に過ぎない、博愛とよ、それは利己の爲の手段である、眞の目的は逸樂にある、短き此世の日の暮れぬうちに一杯の酒をも多く飲みたる者が伶俐者である、然し之れ實に徹底したる論理ではない、その前提既に絶望である、自暴自棄である、人生の意義の否定である、かくして逸樂がその目的であるといふとも論理を成さない、人生無意義ならば逸樂亦無意義たらざるを得ない、來れ我れ試みに汝を喜ばせんとす、汝逸樂を極めよと、嗚呼之も亦空なりき、……凡そ我が日の好む者は我れ之を禁ぜず、凡そ我が心の悦ぶ者は我れ之を禁ぜざりき (二章一節)
 事業は如何、政治、産業、土木、慈善、社會改良、風紀矯正、その名美はしくその實も亦少しく意味あるものゝ如くである、然しながら之等現世の改善により人の幸福を増す畢竟幾何ぞ、穀は倉に充つ

るも心は義に飢え制度完備するも罪の癒さるゝ途なくんば事業の價値亦知るべきのみ、事業の爲の事業ではない、若し靈の爲の事業に非ずんば即ち肉の爲、逸樂の爲の事業である、誰かいふ事業の成功と、現世のみを目的として事業の成功は亦人生の失敗たるに外ならない、

我れ我が手にて爲したる諸の事業を顧みるに皆空にして風を捕ふるが如くなりき、日の下には益となるものあらざるなり(二章十) 幸福なる家庭!之は慕ふべきものであるに違ひない、然し之を人生の目的とするには餘りに貧弱である、わが靈と肉との凡ての活働凡ての勞苦が唯家庭の幸福を中心として動くのであると聞て我等はその報償の過小にしてその目的の自己本位なるに驚かざるを得ない、加之家庭の幸福は如何にして獲得せられ如何にして維持せらるゝ

平、患難、死別、愛情の冷却等の害虫が喰ひ入らんとするとき現世主義の人生觀はよき門守たるに適しない、

日の下に汝が賜はるこの汝の空なる生命の日の間汝その愛する妻と共に喜びて暮せ、汝の空なる生命の日の間しかせよ、(九節)

然り此書の記者の繰返していふが如く既に汝の空なる生命の日の間である、家庭の幸福の故にこの生命が空ならざるを得るといふのではない、愛する妻と共に喜びて暮す亦空なりといふのである。

寔に若し墓が我等の行先であるならば此世に在て我等の目的と爲し得べき價値のあるものは一も無い、此世の提供するものは我等の最も欲する處のものでない、而して我等の最も願ふ處のものは現世のみでは充たれないのである、我等は生れながらにして二三の大なる要求を荷うて來て居る、墓に至るまでの短き暗き旅路にては何處

にも此荷を卸して安らうべき處はない、若し墓の彼方に美はしき園
 が在て其處にて此重荷が悉く取除かれ心の疲れが限なく癒さるゝ
 に非ずんば我等の一生は全然失敗である。
 我等は先づ第一に罪よりすつくり潔められたいともの切なる
 要求を有つて居る、十重二十重に我等の身を縛れる罪の絆を見事に
 断ち切つて雪よりも白きものとなりたい、朝より夕まで罪の惱みに
 泣かざること幾時ぞ、愛すべき人を愛せんとして愛することを得ず、
 汚れたる物より眼を反けむとして却て心奪はれ、或は黒しと知りつ
 ぐ之を白しと言ひ、利己、傲慢、冷酷、虚偽、卑怯、嫉妬、虚榮、
 情慾……數知れぬ頭を擡げて罪の蛇は我に纏ふのである、我は罪
 を憎まざるに非ず、否その醜陋汚穢に戦き恐れつゝ而も尙之を棄て
 去ることができない、罪との惡縁全く絶え果つるに非ざれば我は枕

を高くして眠ることができないのである、憎むべき罪よ、汝は實に
 わが憂患である、汝だに微りせば我は短き現世のみにても満足せむ
 ものを、
 我は罪の下に賣られたり、そは我が行ふ所のものは我も之を善し
 とせず我が願ふ所のものは我之を爲さず、我が惡む處のもの我之
 を爲せばなり……我れ内なる人に就ては神の律法を樂めども我が
 肢體に他の法ありて我が心の法と戦ひ我を擒にして我が肢體の中
 に居る罪の法に従はするを悟れり、嗚我れ惱める人なる哉、この
 死の體より我を救はん者は誰ぞや、(羅馬書七章
 十四節以下)
 噫我れ惱める人なるかな、何人によりて如何にして救はれるのであ
 る乎、我は知る、この短き現世に於て人は罪より全然潔め盡さるゝ
 ことのできない事を、我は幸にしてやゝに罪より遠ざかりつゝあ

る、而も日既に午を過ぎて行途はいとも遙けし、此世の日没までにはとても旅行は終らないのである、有史以來五千年、生を此世に享けし者幾百億にして未だ神の子イエスキリストを除く外一人の完全な罪より絶縁したる者あるを聞かない、寔に此世は罪の宿である、我等は此處に客たる限り其臭氣の多少にても身に染むるを免れ難いのであらう、罪より潔められんとして我等の望みは此世に繋がるを得ないのである。

要求の第二は永生である、死の手が無理やりに我を拉して往かうとする時唯左様ならと言つた切り我なるものが全く消えて終ふとは堪へ難きことである、既に我を遺して漂然として去りしかの愛する者と最早永久に再會の機がないのであつたらば如何、肉體の朽ち果つるは寔に已むを得ない、然しそれと共に我なるもの、彼なるものが

朽ちて終ふのであるならば人の世に在る何故乎無限に吸はれ死に吞まれ意味なき過去と消えん爲に乎(「愛吟」譯出)之れ實に我等の堪ふる處でない、受造者の空虚に歸せらるゝは其願ふ處に非ず、我等も自ら心の中に歎きて身體の救はれんことを俟つ(羅馬書八章二節)即ち肉體の朽ちたる後に猶それを代る朽ちざる生命の與へられん事を切望する、此世の向に猶彼世の在らん事は我等の深き要求である、
 要求の第三は神——眞の父なる神を見たい事がそれである、神とよ、そんな者は我胸の中に陰も見當らないと言ふ者があるかも知れ

ない、可し卿は暫く無神論者として在るがよい、然しながら卿も亦人である、今に時が来るのである——何かは知らず慕はしさに堪へざる時が——その時卿の頭は豪然として言ふであらう、我何ぞ神を要せむと、然し卿の心が裏切るのである、而して窃と胸の戸を開いて彼を迎へんとするであらう、人の神を慕ふ要求は必ずしも痛切ではあるまい、實に人は多く彼を忘れて居る、然しなから放蕩息子も遂に父を憶ひ出すの時が来る、その時父見たさは何よりも深き要求となるのである、その時彼も亦ビリポと共に叫ばざるを得ない、主よ我等に父を示し給へ、然らば足れり(四章八節十)と、而して我等は此世に在りて臆るに神を見ることはできるけれども、残る限なく明白に彼の姿をうち仰ぐことはできない、鏡をもて見る如く昏然には見るを得とも未だ面を對せて相見ることとはできない、

肉に繋がれて居る限り薄き帽子が全く取り除かるゝ時はないのである、然らばその時は何時になつたらば来るのであらう乎、墓の此方かはた彼方か、抑も亦その時が永久に來ないのである乎。無罪と永生と見神と、かくも大なる要求を荷うて我等はその充さるべき處を捜すも此世には到底見當らないのである、若し墓より先に行先がないならば我等は唯的もなく歩を運んで居るのである乎、パンを求めて石を與へらるゝも我等の飢の癒さるゝ筈がない、此世がその尊ぶ凡ての寶を我等の眼の前に羅列するともこの三のものが得られないならば唯に悦びでないのみならず、それは徒に憂の種である、我等の望みを此世にのみ繋いで絶望はわが人生觀とならざるを得ない、然らば即ち眼を擧げて來世を望まん乎、誰か墓の彼方につき確實なる保證を與ふるものぞ。

それ神は其生み給へる獨子を賜ふほどに世を愛し給へり(約翰傳三章十六節)
 己の子を惜まらずして我等凡ての爲に之を付せる者はなか彼に併
 へて萬物をも我等に賜はざらん乎(羅馬書八章)
 神は我等を愛するの餘り、我等を救はむとの熱心の餘り既に其獨子
 を賜うたのである、見よ十字架上のイエスキリストを、我等は未だ
 嘗てかゝる愛を見た事はなかつた、斯愛はどうしても人の愛ではな
 い、斯愛を顯はしたる者は神御自身の代表者たるその獨子より外あ
 り得ないのである、嗚呼神はその獨子を我等に賜ひし乎、恩寵と眞
 理とに充てる榮光の獨子をも我等の爲に惜まらずして付し給ひし乎、
 是は理想に非ずして史上の事實である、二千年前エルサレム郊外カ
 ルバリ山上に人の罪と其に對する神の愛とは遺憾なく顯はれたの
 である、神の我等に賜ふべき恩恵を想像して是よりも大なるものに

思ひ當ることはできない、最上のものを先づ賜うたのである、而し
 て之を以て神は保證し給ふのである、その獨子の流し給ひし血を以
 て神は我等に約束し給ふのである、既に現はれたるこの絶大の恩恵
 を見て後に現はるべき凡ての恩恵を疑ふことはできない、神は必ず
 萬物をも我等に賜ふに相違ない、而も必ず彼に併へてある、先づ
 最上の恩恵たる彼を受けずして別に萬物を受くることはできない、
 彼が萬物を受くるの途である、彼を受けて初めて神と我との和睦が
 生ずる、神の先づ彼を賜ひし理由は此處にある、彼をだに受けん乎、
 我等の眼は未だ見ざりし處に向て開け新しき望は簇々と頭を擡げて
 來る、その時より我等の願る處は見ゆる處の者に非ず、見えざる處
 のものとなるのである、その時より我等は自己の行先を發見して雀躍して喜ぶ
 ものである、その時より我等は自己の行先を發見して雀躍して喜ぶ

のである、「我等こゝに在て恒に存つべき城邑なし、惟來らんとする城邑を求む」(希伯來書十、今や來世は神の賜ふべき新なる恩恵として最も確實なる希望を繋ぐ處である、己の子を惜まざして賜へる者はなどか彼に併へて來世をも賜はざらん乎である、我等はイエスを信ずるが故に又疑はずして來世を待ち望むのである。

來世！彼處にて我等の切なる要求がすべて名残なく充さるゝのである、彼處にて親しく神と面の當り相接することができ、帕子は綺麗に除かれて神の榮光は隅々までも明白に輝き渡るのである、神の智慧の奧義に至るまで完全に我等のものとなるのである、我等今鏡をもて見る如く見る處昏然なり、然れど彼の時には面を對せて相見ひ、我今知ること全からず、然れど彼の時には我が知らるゝ如く我知らん(哥林多前書十)

僕ども神の面を見、神の名彼等の額に在るべし、彼處には夜あることなく燈の光と日の光とを用ゐることなし、そは主なる神彼等を照し給へばなり(黙示録二、五節)

彼處にて朽つべき身體は救はれ朽ちざる生命に入ることができ、而して此世にての艱難は悉く癒され、愛する者と再び手を握り永久に共に在ることができ、彼處にて死は再び我等の煩ひとなることはできないのである、

この壞つる者は必ず壞ちざる者を衣、死ぬる者は必ず死なざる者を衣るべし(哥林多前書十、五十三節)

我等之を知る、我等が地に在る幕屋若し壞れなば神の賜ふ處の屋天に在り、手にて造らざる窮なく有つ處の屋なり(哥林多後書一、十節)

神彼等の目の涙を悉く拭ひ取り復死あらず、哀み哭き痛みあるこ

となし、それは前の事既に過ぎ去ればなり(一、黙示録二十、四節)、かくて朽ちざるものを衣せられ面のあたり神を見ることを得て罪は勿論痕跡もなく消え去るのである、その時我等は既にキリストの新婦である、

婦は潔くして光ある細布を衣ることを許さる、(二、此細布は聖徒の義なり、九、黙示録八、十、九章)

我等はその時全く神に肖たる潔きものとなるのである、即ち彼處にて完全なる聖化が實現せらるゝのである、

我等今神の子たり、後如何、未だ露はれず、其現はれん時には必ず神に肖んことを知る、それは我等その眞状を見るべければなり(三、約

第一章三節、凡て我等帕子なくして鏡に照すが如く主の榮を見榮に榮いや増り

て、其同じ像に化るなり(四、哥林多後書、三、十八節)、罪なく死なく榮光の體に化せられ神と共にキリストと共に又愛する凡ての人と共に永久に相愛して存在するの國、これ即ち來世である、之即ち天國である、神はこの國を必ず我等に與へんと約束し給ふ、而して其保證はイエスキリストの血に在る、而して又彼を信する者は尚その上に質として聖靈を與へられる、實に神は先づ十字架を以て我等に絶大の約束を立て更に聖靈を以て之を堅うし給ふのである、イエスキリストに頼りて我等の希望は唯益々確實を増すのみである、

イエスキリストは是といひ又非と言ふが如き事なし、彼には唯是といふことあるのみ、凡て神の約束は彼の中に是となり又彼の中にアメンとなり我等に由て神の榮の顯はるゝに及ぶ、……神亦我

等に印し且質として靈を我等の心に賜へり(哥林多後書一章十)
 然り、聖靈を與へられてより我等の罪は徐々に潔められ、神の姿は
 日々に鮮けくなり往くのである、この不思議なる變化の實現は正し
 く來らんとする生活の質ではない乎、その度に於ては遙に及ばずと
 雖もその質に於ては全く同一である、天國の反映は既に地上に現は
 れて居るのである、來世の香氣は既に現世に於て之を嗅ぐことがで
 きる、寔に今迎りつゝあるその途の果に必ず我等の福なる行先があ
 るのである、指して往く方向は確に誤て居ない、否歩一步懐しき故
 國の面影は愈々偲ばれて來る、先導者イエスキリストに信頼して我等
 は來世に入ることを少しも疑はないのである。
 來世の希望、是ありて我等は重苦しき現世の生活をも樂むことが
 できる、我等の國籍は今や彼處に在りて此處に在るのではない、我

等は地に在て賓旅である、寄寓者である、此世は宿である、幕屋で
 ある、此處に我等は永住するのではない、温き屋が彼方に俟つて居
 る、神は我等の爲に新しき京城を備へ給うた、其處に入るが爲の準
 備を爲す處が現世である、故に我等の願を露骨に言はしむるならば
 寧ろ速に彼處に移つてキリストと共に在るの生活に入りたい、
 我が願は世を逝りてキリストと共に在らんことなり、之最も美事
 事なり(章二十三節)
 然しながら肉體に止りてその準備を爲すは刻下の急務である、唯に
 我自身の爲のみではない、未だかの驚くべき大なる恩恵を知らず、
 從て希望を墓より彼方に繋ぐ能はずして人生の空を歎じて居る多く
 の同胞の爲め我等は起て福音を傳へねばならぬ、十字架上に現はれ
 し神の愛を證して萬國の民に示さねばならぬ、見渡せば逸樂と事業

と虚しき智識とに悩まされる人のみ多くして眞にイエスキリストに由る限なき恩恵に與れる者としては雨夜の星の如くに寥々たりである。加之却て偽の證を以て福音の妨を爲すもの亦決して尠くない、かゝる間に我等は選ばれて一日も長く主の事業の爲に使はれむことを祈らざるを得ない、我等の希望は來世に在る、而して來世の故に現世も亦貴きものとなるのである。

一粒の麥

一粒の麥もし地に落ちて死なば唯一にて在らん、もし死なば多くの實を結ぶべし、その生命を惜む者は之を喪ひ其生命を惜まざる者は之を存ちて永生に至るべし(約翰傳十二章二十四節以下)、凡て植物の種子は自らその身を保護するの力を有ち堅き皮を被りて獨りその生命を維持せんとして居る、しかし種子が斯くいづ迄も生命を自己の中に取込んで守つて居る間は決して更に大なる新生命を得る事が出来ないのみならず、遂には枯死して終ふであらう、然るに一粒の麥若し地に落つるならば、忽ちその今までの自己本位を棄て、全身を地に明渡してしまふ、堅き皮は破れ地の養分がその中に入り込んで遂に新しき生命が發芽して來る、この事實は至る處に於

て年毎に繰返されて居るので、我等は別に怪しみもしない、然しよく考へれば奇蹟である、なぜ自ら生命を保たんとする間は新しき生命が出来ず却て枯死の恐があるに反し、地に落ちて自己を全く地に委ぬる時は驚くべき新生命が出て来るのである乎、實に種を蒔いて其發芽を見るときに造化の奇蹟を感じないものはあるまい、然し之動かすべからざる事實である、天然のこの原則は少しの例外もなく古來今に至る迄繰返されて居る、寔にその生命を惜む者は之を喪ひ其生命を惜まざる者は之を存つべしである。

この事は之天然の法則である、而して天然の法則とは多く神の攝理の一面に過ぎない、神の攝理なるが故に眞理である、唯に物質界の眞理であるのみならず精神界に於ても亦眞理である、之は新生命發展の法則である、而して生命は唯に肉又は物質に於てあるのみならず、

ならず、靈に於ても亦ある、否靈の生命こそは眞の生命の源であつて、我等は物質の生命の發展に關するこの法則は寧ろ靈の生命の發展に模象されたものであらうと思ふ。

物質に新生命がある、靈にも勿論新生命がある、物質の新生命はやがて物質と共に又消えて終はねばならぬ、之に反し聖靈に由りて生れし靈の新生命は永久に朽つる事なき永生である、然らば我等は如何にして靈の新生命を得る事が出来る乎、朽つべき人間が朽らざる永生を取得するの原理は何處にある乎、汚れたる罪人の心に聖靈の宿り込むといふ法則は何である乎。

イエスはこの間に答ふるに様々の譬を以てし給うた、就中約翰傳十二章に掲げられたるこの一粒の麥の譬は最も適切通俗なるものであらうと思ふ、イエスはこの驚くべき大原理を説明するに難しき哲

理を以てはし給はなかつた、彼の眼には宇宙の大真理も通俗ならぬものは無い、何となれば木の葉の散るも星の飛ぶも均しく大能の攝理であれば、此を説明するに彼を以てするの容易なるは當然の事であるからである、イエスは聖靈獲得の方法如何との大問題に答へて、一粒の麥の如しといひ給うた、我等は實にこの一見全然没交渉なるらしき二個の事實の間に適切正確なる大類似を見出すのである。我等は自己の生命を救ひ永生の福に入らんと欲して自ら如何ほど善行を積み努力修養を重ねると雖も事は絶対に不可能である、やがて恐るべき死は容赦なく襲ひ來りて我等は凡ての所有物を此處に遺し凡ての望を失ひ寂寥に悶え暗黒に恐れ戦きつゝ往かねばならぬ、悲惨なるものにして絶望の死の如きはない、而も我等は之を脱れんとするもその途を知らないのである、所謂力山を抜き氣世を蓋ふの

英傑と雖も自己に頼りて永生を獲得せんとするは恰も木に椽りて魚を求むるの痴愚を學ぶのである。是に於て一粒の麥は我等に範を垂るゝのである、落ちよ、死せよ、死して全身を地に明け渡せよと、地はその抱有する豊なる生命の材料を提供して麥の落つるを俟ちつゝあるのである、然らば即ち我等の生命を引き渡すべきその大地は果して何である乎。人生を悩ましたる最大問題は實に此處に在つたのである、弱き種なる我等を發芽せしむべき地を尋ねて人は長らくさまよつた、その發見に苦みし時代は長かつた、イエスはいま又この解くべからざる謎を以て我等を苦め給ふのである乎、かく思つて彼の顔を見上げた時にこの千年の謎語は忽然として解けたのである、彼である、彼であ

る、彼れ神の獨子イエスキリストこそ即ち我等の生命を託ぬべき大地である、謎のこゝろは今や讀むことができた、人の子榮を受くべき時至れり(約二傳三十三節)といひて將に光榮ある犠牲の死とそれに引き續く復活とを實現せんとし給へる彼れイエスキリストに従うて我等も亦死なねばならぬのである、一切を悉く棄て去り唯十字架を負うて起たねばならぬのである、この罪に汚れし自己を投げ出して全く彼に明け渡さねばならぬのである、その時舊き小き我は死して新しく大なる我が生るゝのである、自ら保たんとしたる靈を碎いて終つた時に初めてイエスの靈を吸ひ取る事ができるのである、宜なり、神の求め給ふものは碎けたる靈なりと(詩十篇七十一節)、彼は善行を要求し給はない、勿論祭物を要求し給はない、彼は其獨子イエスキリストを我等に渡して、唯信ぜよ然らば救はれむと促し給ふ、實に我等

の救はるべき途は彼れイエスである、自己に死して彼に生くる時に我等は何の功績もなくして直に義とせらるゝのである。誠に實に汝に告げん、人若し新に生れずば神の國を見ること能はじ：：人は水と靈とに由て生れざれば神の國に入ること能はざるなり(約三傳三章)、新生とは舊生命の死滅と新生命の創造である、水によりて舊生命を洗ひ棄て靈に由て新生命を享受せざれば永生は我等に臨まない、而して舊き我を棄て去つて唯イエスを主と仰ぐときに聖靈は必ず我等の胸に宿り永へに朽ちざる新しき大生命が我等に賦與せらるゝのである、何故にさうであるかと問ふ乎、我等は知らない、之れ神の爲し給ふ處にして我等の眼にはいと奇しとする處である、然し大なる真理はみなさうである、我等はその事實たることを知れば足りると

思ふ、而してその事實であることは疑ない、一粒の麥の發芽は我等の心靈的實驗と相俟ちて之を證明するのである。
 一粒の麥もし地に落ちて死なば多くの實を結ぶべしと、之は洵に狭き門である、然しながら生命に至るの門は之を措いて他に無いのである。

戦闘と勝利

蛇の如く智く 鴿の如く單純

此世に處して如何に振舞ふべきか、即ち所謂處世術又は世渡りの道に迷ふのは獨り世間普通の人のみではない、否我等イエスキリストの僕として一種特別の人生觀を抱く者は一入この問題に苦むのである、寔に我等は金力權力其他何等の勢力を有たない、我等はいは裸一貫である、我等に何の權謀術數もない、かゝる者が複雑なる世に投ずるは恰も狼の中に羊の入るが如きものである、こゝに大なる危険がある、我等は如何にして身を全うするのであるか、羊は如何にして狼に打勝つことが出来るのであるか。

イエスの十二弟子が初めて福音を宣べ傳へんが爲に遣られた時は丁度是であつた、否當時の社會の狀態と彼等の立場とを考ふれば一層危険なるものであつた、彼等の處世術は實にクリスチャンのそれの初穂である、イエスは何と彼等を教へ給うた乎、どんな餞別を以て彼等を餞け給うた乎。

我汝等を遣はすは羊を狼の中に入るゝが如し、故に蛇の如く智くと邦譯聖書に鳩の如く馴良かれとあるは確に誤譯である、曰く蛇の如く智く鳩の如く單純なれ(馬太傳十章十六節)、若し是丈の短き言葉に止つて居たならば其意味は明瞭といふことは出來ない、蛇の如く智くとはどんな風に智いのであるか、鳩の如く單純とはどんな性質の單純であるか、世にはクリスチャンと稱する人々までがイエスの教を深く味はないで自

分の淺はかな考に當てはめて此言葉を解して居るものがないではない、即ち彼等の或者はいふ、我等が世に處して伶俐に振舞ふは決して悪いことではない、寧ろキリストの要求し給ふ處であると、彼等は此の如く稱へて身の危険を逃れ避くるに甚だ巧である、しかし是果して此言の精神であらう乎、否、斷じてさうではない、却てその正反對である、そのことは少しくイエスの教を注意して研究すれば明である。

イエスの教は決して斷片的ではない、四福音書の載する教訓はいづれも深き含蓄と前後の脈絡とを有つて居る、イエスが十二弟子を送り給うた時の言葉も亦さうであつた、彼はこの蛇の如く智く鳩の如く單純を更に親切に説明し給うたのである、一慎みて人に戒心せよ、そは人汝等を集議所に解し又その會堂にて

鞭つべければなり、又我故によりて侯伯及王の前に曳るべし、是
 彼等と異邦人に證をなさんが爲なり(十章十七、
 二 兄弟は兄弟を死に付し父は子を付し子は兩親を訴へ且之を殺さし
 むべし、又汝等わが名の爲に凡ての人に憾まれん(三十一、
 三 弟子は師より優らず僕は主より優らざるなり(四節)
 四 地に泰平を出さんが爲に我來れりと思ふなかれ泰平を出さんとに
 あらず刃を出さんが爲に來れり、夫れわが來るは人を其父に背か
 せ女をその母に背かせ嫁を其姑に背かせん爲なり、人の敵はその
 家の者なるべし(三十四節)
 蛇の如く智くとは是である、イエスは決して左顧右眄して巧妙に身
 を處せよと教へ給うたのではなかつた、彼は其反對に汝等は危険を
 避くることが出來ないのである、イエスの弟子はイエスの名の爲に

苦められ迫害せられその近親より疑はれ惡まれ敵として取扱はるゝ
 の運命を有つて居るのであると宣告し給うたのである、而してこの
 事を明白に覺悟するのが即ち彼の所謂智くである、恰も蛇が頭を擡
 げて危険の所在を十分知り抜くが如くである、イエスの弟子となつ
 た者は世に處するに當て先づ第一に自己の將來の境遇は異常なる苦
 痛、迫害、危険であることを十分に知り抜かねばならぬ、是を知ら
 ずして自らイエスの弟子なりと信じつゝ遂に世に囚はれた者の實例
 は數限りない、嘗て善き信者の如く見えし者中ごろ心を變じて世に
 降りし多くの紳士は皆之である、彼等には最初よりこの智慧が欠け
 て居たのである、彼等はイエスの弟子としてこの世を通ることの如
 かに艱難危険なることであるかを知らなかつた、是を知らずしては
 既にイエスの弟子たるの資格がないのである、この一事を知ることは

は確に大なる智慧である、凡ての智慧に勝るの智慧である、それ故にイエスは又或る時主よ何處に往き給ふとも我從はんといひし學者に對して答へ給うた、「狐は穴あり空の鳥は巢あり、されど人の子は枕する處なし」と(馬太傳八章二十節)、然り人の子の枕する處無かりしは我等十分之を知つて居る、果して知らば彼の弟子も亦同じ運命に遇はずには濟まない、是即ち人に證を無さんが爲に必要である、イエスの弟子として世に處せんとする者が先づ明白に覺悟せねばならぬのは此事である、之を知つた者は處世術に於て何よりも大なるものを知つたのである。

次に鴿の如く單純なれとはどういふことである乎、イエスは前の四の教訓の終毎に各々又左の言を附加へ給うたのである、
一人汝等を解さば如何に何をいはんと思ひ煩ふ勿れ、其時言べき事

は汝等に賜はるべし、是汝等自らいふに非ず汝等の父の靈その裏に在ていふなり(二十九節)

二されど終まで忍ぶ者は救はるべし、我寔に汝等に告げん汝等イスマエルの諸邑を廻盡さる間に人の子は來るべし(三十三節)

三弟子はその師の如く僕はその主の如くならば足りぬべし、…是故に彼等を懼るゝ勿れ、そは掩はれて露はれざる者なく隠れて知られざる者なければなり、我幽暗に於て汝等に告げしことを光明に述よ、耳をつけて聽きしことを屋上に宣播めよ、身を殺して魂を殺すこと能はざる者を懼るゝなかれ、唯汝等魂と身とを地獄に滅し得る者を懼れよ、二羽の雀は一錢にて賣るに非ずや、然るに汝等の父の許なくば其一羽も地に隕つることあらず、汝等の頭の毛亦みな數へらる、故に懼るゝ勿れ汝等は多くの雀よりも優れり、

然ば凡そ人の前に我を識るといはん者を我も亦天に在す我父の前
 に之を識るといはん(三十五節)
 四 我が爲に生命を失ふ者は之を得べし(三十九節)
 イエスは先づその弟子が世の人に見ることの出来ないやうな大なる
 艱難、苦痛、迫害、危険に遭ふことを免れないといふ警告を發して
 然る後之に對するの心得を述べ給うた、彼は決して故に汝等十分研
 究して豫め避難の道を講ぜよとは教へ給はなかつた、彼は決して汝
 等の智囊を絞り汝等の手段方法を盡して身を全うせよとは教へ給は
 なかつた、寧ろその正反對である、彼はいひ給ふた、自ら思ひ煩ふ
 なかれ、唯愛の父に委せよ、父を信頼して終まで忍ばば必ず救はる
 べし、否、終までといはず、中途にして既に我汝を救はんが爲に來
 らん、我自身汝等以上の經驗を嘗めて汝等に模範を示す者である、

故に我と同様の運命に遇ふことを寧ろ満足せよ、此の如く愛の父な
 る神と我とに絶對的に信頼せば汝等何の恐るゝ處もない、否唯に迫
 害を耐へ忍ぶのみならず、更に進んで戦を挑むべし、帷幄の中に聞
 きし福音を進撃喇叭を以て吹奏しつゝ、野外に突進すべし、神は常に
 汝等を守り給ふのである、而して汝等の報は必ず天に於て得らるゝ
 ののであると、なんと勇ましい且恃もしい命令ではないか、其處に何
 の利害の打算もない、何の策略も方便もない、何の恐怖も躊躇もな
 い、唯神！キリスト！彼に對する信頼あるのみである、凡てを委
 せして全く顧みないのである、何等の單純！その單純なるだけそれ
 だけ力は強い、此單純無垢の信仰あるによつて我等の處世術は定ま
 るのである、外に何も要らない、金力権力は勿論友さへも要らない、
 唯主イエスキリストあれば足りるのである、キリストそのものが我

等の處世術であるのである、何となれば是汝等自ら爲すに非ず、汝等の父の靈その中に在りて爲すなりであるからである、我等が世に勝つのではない、聖靈我等の中に在りて我等をして世に勝たしむるのである、我等の處世術とは唯聖靈を迎へることがさうである。

噫、蛇の如く智く鴿の如く單純なれど、語は短くして意味は實に深遠無量である、その前半に大なる警告の鐘を聞きその後半に絶對的信頼の福音を聞く、この警告とこの福音とに送られて首途を立つにあらずば我等の征戰に勝利の望みはない、迫害を必期し唯一筋に主のみ頼り恃むによつて前途は盤石の如くに堅いのである。

孤獨の勝利

イエスキリストの一生はそれ自體が既に眞理であつた、彼は唯に其言を以て神を顯はし給ひしのみならず、又その行を以て眞理を顯はし給ふた、我等は思ふ、若し聖書の中より彼の説き給ひし教訓が除き去らるゝとも彼の生涯に關する記事が存つて居る限りは我等は福音を失はないのであると、實に彼の生涯を探りて數限り無き深き眞理を發見するのである、殊に彼が地上三十年の生活を全く孤獨の裡に過し給ひしが如きは我等の爲に大なる教訓を垂るゝものなるを憶はざるを得ない。

第一に彼は其家庭に於て既に孤獨であつた、勿論彼は母として聖きマリアを有つて居た、彼女がイエスの生れる前よりしてその神の

子であるとの默示を受けて居た事は聖書の評す處である(路加傳一、然し聖書は又それと同時に彼が家族の人々より狂人として取扱はれたと記して居る(馬可傳三章、マリアと雖も未だ眞の知己ではなかつたのである(路加傳二章五節、況して彼の兄弟は彼を解することが出来なかつた(約翰傳七)、イエスは家庭にあつて既に孤獨の人であつた。郷黨の隣人は如何であつたか、イエスはガリラヤ諸村で多少の信者を得給ひしときにも獨り故郷ナザレに於ては人々皆躓き遂に厭うて彼を棄てたとある(馬太傳十五章)、彼は何處より此智識を得しや、彼が大工の子にしてヤコブヨセ等の兄弟なるは我等のよく知る處である、斯して郷人はイエスの大を認めることが出来なかつた、彼がキリスト神の子であるとは夢にも思はなかつた處であらう、實に預言者はその故郷にて尊ばるゝことなしである、恐らくガリラヤ諸

村のうちナザレ人が最も彼を解し損なつたのであらう。家族然り郷人然り、弟子は如何であつたか、弟子は最初から彼の人格を慕うて従つたものである、故に何人が彼を誤解しやうとも少くとも弟子だけは彼の知己であるべき筈である、而してその中にはペテロも居た、ヨハネも居た、彼等がイエスキリストの忠實なる宣傳者であつたことは事實である、然しそれは後のことであつた、イエスの此世に在り給ひし間弟子等の信仰は尙見すばらしきものであつた、十二人の中最も勝れて居たるペテロさへ彼の死を解することが出来なかつた(馬太傳二十六)、彼の蹉跎に關するイエスの豫言を讀んで誰か泣かぬものがあらう乎、鶏鳴かざる前に汝三たび我を知らずといはんと(馬太傳二十六)、この悲しき豫言は的中した、恃み甲斐なきペテロよ、況して其他をやである、イエスの捕へられし時に一人

の彼の爲に生命を棄てんとする弟子が無かつたではないか、ゲッセマネ山上の血を濺ぎての祈の時さへ弟子中の粹を抜きたるベテロ、ヨハネ、ヤコブの三人が意氣地無くも揃つて居睡りを催して居たではないか、噫大なる悲劇！大なる孤獨！否、それ處ではない、イエスを裏切りしその人は果して何人であつたか、その名を聞くも憎しげなるイエスカリヲテのユダは抑も何人であつた乎。

我等は更に眼を轉じて當時の識者を見やう、イエスの當時にも勿論學者はあつた、宗教家はあつた、せめて彼等の中になりともイエスの知己があつたであらうか、舊約の預言に精通して居た彼等こそイエスのキリストなることを先づ第一に覺り得べき筈であつた、しかしながら事實は却て正反對であつた、彼等は學者、宗教家なりしが故に却てイエスを知ることが出来なかつた、憐むべきは赤子の心

を有たざる智者達者である、憎むべきは偽善なる學者バリサイの徒である、彼等は相寄つて遂に神の子イエスを十字架に釘けてしまつた、祭司の長カヤバがイエスを罪人なりと宣告したその理由は即ちイエスが自己をキリスト神の子であると言うたからである、實にイエスを識らざりし者にして學者宗教家の如きはない、恐らく今日に於ても亦さうであらう、彼等の眼は唯此世に向て開かれて居る、故に彼等がイエスの知己たらざりしは寧ろ神の聖旨に出づるのである、是即ち彼等に對する審判であつたのである。

當時の國民は如何であつたか、大多數の群集の行動は無意味なるものであつた、彼等は或時にはイエスの教に驚嘆して居る(馬太傳七章二十節)、或時には好奇心を以てぞろ／＼と彼の跡を追うて居る(馬太傳十一節十九等)、或時には又喝采して居る(馬太傳九章二十一)、然しながら何時も

彼等には真心がなかつた、赤子の心がなかつた、彼等は到底モツブたるに過ぎない、見よピラトがイエスを赦さんと欲してバラバかイエスカと問ひし時に彼等は口を揃へてバラバを赦せと叫んだではないか、教主の出現を待ち望んで居た彼等も學者や宗教家と一緒になつてイエスを十字架につけてしまつたのである、彼等は眞個の平民ではなかつた、たゞ境遇上の平民たるに過ぎずしてその心は矢張り貴族的であつたから遂に平民の友を認むることが出来なかつたのである。

最後に我等の考ふべきは罪人と病人とである、社會の弱者である、實にイエス自身の宣ひし通り、心の貧しき者は福なるかな、哀む者は福なる哉である、彼等は自己の弱さを知て居る、彼等は自己を投げ出すことが出来る、赤子の心を抱き得べきは彼等である、故にイ

エスの同情は偽善なる學者パリサイの徒には在らずして憐むべき罪人病人に向て濺がれた、彼は自ら罪人の友を以て任じた、彼は病める者に向て満腔の同情を有つて居た、娼妓、税吏、癩病人、盲者、是等の者がイエスの友であつたのである、そしてイエスに對して兎に角多少の信頼を懷いて居たものも亦彼等であつた、イエスが病者を癒し給ひしは皆その信仰を認め給うた上の事であつた、汝の信仰を癒せりとある、イエスの在世中多分最もよく彼を解したと思はるゝベタニアのマリアの如きも悪しき行を爲せる婦人であつたと福音書記者の一人は記して居る(路加傳三十九章節)、實にイエスの知己にして若し求むべくんば彼等弱者の中にあつたのである、然るに彼等の間にイエスを明かに神の子であると信じて居たものはなかつた、預言者の中の最も大なる者、恐らくかゝる程度に於て彼を解して居た

ものであらう、然らずんば復活を待たずして彼等の間に大なる信仰
 が起りし筈である、畢竟彼等と雖も人以上のイエスを認むることが
 出来なかつたのである。
 是に於てイエスの生涯は全然孤獨であつた、國民彼を知るに非ず、
 識者彼を認むるに非ず、郷人彼を知らず、家族知らず、弟子亦知ら
 ず、天涯地角彼は唯一人であつた、世に若し寂寥を啣つべき人あり
 とせば其は實にイエスであつた、何人の孤獨か彼に比ぶることが出
 来やう乎。
 然しながら福なるは彼である、人に對して無限の孤獨を感じ給ひ
 し彼の心は決して寂寥ではなかつた、一人の友を有たざりし彼は却
 て常に悦に充ちたる人であつた、彼は屢々人を去て獨り寂しき處に
 往き給うたとある(馬可傳一章三十五節路、加傳四章四十二節等)、孤獨なる彼が寂しき處に往

いて何を爲し給うたのであらう乎、祈！然り心ゆく祈、其友に言ふ
 如くに面を合せて神と言ふその祈、是ありて彼は寂しくなかつたの
 である、家族は彼を狂人と見た、然し神はわが愛する子よといひて
 慰め給ふ、郷人も弟子も彼を解しなかつた、然し父はよく其獨子を
 知り給ふ、識者も平民も彼を十字架に釘けんと焦つた、然し父なる
 神はその國に彼を招き給うたのである、病人も罪人も彼の神の子で
 あることを明かに知り得なかつた、然し窮なき榮光と凡ての者を制
 する權威とは彼に賜はつたのである、
 汝等散りて各人その屬する所に往きたゞ我を一人殘さん、然れど
 我獨り居るに非ず、父我と共に在るなり、…我すでに世に勝て
 り(約翰傳三十六章三)
 眞に彼の言の通りである、人は皆彼に背を向けて去つた、然し彼は

孤獨なるが如くに見えて實は大なる伴侶を有し給うた、父のみは常に彼と共に在りて最大の權威を彼に賜うた、凡て神の屬は彼の屬となつた(七章十節)、世は彼を棄てたけれども神は世を彼に與へ給うた、かくして彼を十字架に釘けたる世は彼を殺さずして却て自己を殺したのである、此世の主なる罪と死とはその時より權力を失つてイエスキリストに由る聖潔と永生とが世を支配するに至つたのである、驚くべき勝利、而してこれ孤獨の勝利である、世に孤獨にして父と共に在る者の勝利である、人に知られずして神に知らるゝ者の勝利である。

而してイエスの生涯の孤獨はたゞに神の子の勝利を語るのみではない、凡て真理は常に孤獨にして世に勝つものなるを教ふるのである、寔に真理の力あるはその神より出づるものなるが故である、眞

理は相寄つて力を増すものではない、眞理は寸毫も人に頼るものではない、眞理は獨り立つて強い、神に由て立つて獨立は何よりの勢力である、今の人はいふ團結は力なりと、然し眞理はさうではない、眞理に取ては獨立は力である、我等はイエスに倣ひ神の事業に與るに決して世の人の如く共同の力を望まない、若し共同するに非ずば倒るゝものならば初より神の事業ではないのである、我等は世に與みしない、人の力を頼まない、我等は大なる伴侶がある、イエスキリスト之である、彼と共に在て我等は孤獨を以て満足する、彼を替として立つて獨立は感謝すべき恵である。

基督信者の境遇

イエスキリストを信じ彼に従はんとする者の現世に於ける境遇は決して安易なるものではない、否彼には不信者の知らざる苦勞がある、イエスを信ぜざりしならば遭遇せざるべかりし種々なる特別の患難が彼を俟つのである、寔に彼の福なる所以は境遇以外に於てある、イエスを信じて境遇の幸福を期待する者は甚だしく失望せざるを得ない、而してこの失望の爲にイエスを棄てし者は決して少くないのである、勿論眞にイエスに顯はれたる神の愛を識りて彼に全生を献げたる者に取ては境遇の患難を恐るゝの理由はないけれども聖書に存れるイエスの教訓を探りて其特別の意味を知ることがは又信者の大なる慰藉たるに相違ないと思ふ。

第一 迫害

我等は先づ山上の垂訓に於てこの事に關する福音を發見する、イエスは茲に福なる哉との冒頭の下に心の貧しき者、哀しむ者、柔和なる者、飢渴く如く義を慕ふ者、矜恤ある者、心の清き者、平和を求むる者及び義しきことの爲に責めらるゝ者を擧げ給ひ、而して之等の人々の福である理由は或は天國を有つことができる、或は神を見る、或は神の子と稱へらるゝ、その他何れも神又は天國と親しき關係に立つことを得るによるとの意味を語り給うた、即ち之を換言すれば彼等は福である何となれば信仰を有つことを得るからであるといふに歸着するのであつて畢竟信者となるべき者の素質を説明し給うたに過ぎない、話題の主眼は信者その人にある、信者の福について述べんとするに先だちまづ如何なる人が信者となるべきかを説

明し給うたのである、さればその直ぐ次には語調を變へ今までの三人稱を棄て、直になんぢらと二人稱に移りなんぢらは福なり、何となれば我が爲に人なんぢらを訴すりまた迫害しいつはりて各様の惡言をいはんと露骨に明言し給うた、なんぢらと呼びかけられしは群集に非ずして特に彼を慕うて山の上まで從ひ行きし弟子たちである、殊にわが爲に迫害せられんとあれば信者が特別に信仰の爲に受くる迫害の意味であることは疑ふよしもない、故に所謂山上の垂訓なる福音の中心は信者そのものにあることは明かにして、而かも此説教はイエスのガリラヤ傳道の初期に屬するものであるから即ちイエスはその傳道の最初より信者の患難に關する福音を高唱し給うたのである、然り福音である、但し患難の福音である、福なる哉、何となれば我が爲に患難を受ければなりと、之れ山上垂訓の根本精神である、

る、イエスの眼には患難を離れて信者はなかつた、迫害は信者の附きものである、我が爲、即ちイエスキリストの爲の迫害である、信者はイエスの爲に迫害を受けて以て愈々明かに彼に就て證をするところができる、又迫害は信者自身をイエスに繋ぐが爲にも必要である、我等は彼の爲に苦むだけ多く彼の愛を識るのである、故にこの迫害は信者ならでは經驗することができない、又若し眞正の信者であるならばどうしても免るゝことができない、イエスは今何をも知らずにと自ら天國を嗣ぐが爲に又神の子に就て證をするが爲に避くべからざる患難を思ひ同情の念に禁へざると同時に、彼等の人に勝りて特別に福なる理由も亦其處にあることを教へずしては已む能はざるを感じ給うたのであらう、從て此事に關する彼の言葉はいたく高調に

達して居る、
 我がために人汝等を誦しまた迫害いつはりて様々の悪言をいは
 ん、其時は汝等福なり、喜び樂め、天に於て汝等の報賞多ければ
 なり、そは汝等より前の豫言者をもかくせめたりき(馬太傳五章十一、十二節)
 天に於て報賞多ければなりと、我等が特別の迫害を忍び得る最大
 の理由は此處にある、我等はイエスを信じてより最早此世に望を繫
 ぐものではない、此世は彼世に入るが爲の準備である、短き間の準
 備である、而して此處に在る間に患難を受くることが獨り自分のみ
 ならず他人が彼世に入るが爲に必要なりとして特に神より之を負は
 せらるゝならば我等は感謝して受くるのほかはない、之を避くるは
 此世の幸福の爲に彼世の榮光を棄つるのである、イエスの名の爲の
 迫害であるからイエスをさへ棄つるならば此迫害はやむ、唯彼を棄

てよ、然らば此も得られむ、彼も得られむ、然り或は萬國をも得る
 かも知れない、かゝる試惑は屢々信者を襲ふのである、然しながら
 イエスを棄てんとして彼のみを棄つることができない、彼と共に我
 が望みを抛たざるを得ない、否彼を棄て、我は我が現在及將來の生
 命を悉く棄つるのである、何となれば我等の生命は今やイエスを泉
 として溢れて來るものであるからである、我等は天に於ける報償と
 此世に於ける幸福との輕重をよく知つて居る、彼を棄て、之を與へ
 むといふとも應ずることはできない、況んや迫害の中に神は必ず我
 等を助け給ふ、イエス御自身が我等と共に今も尙患み給ふのである、
 然らば迫害はむしろ我等に賜ふ特殊の恩恵である、必要なる恩恵で
 ある、我等はその中に在て感謝しつゝ榮光を顯はすべきである。
 第二 簡素なる生活

信者は富者たる能はずとはイエスの明言し給うた處ではない、然しながら彼は眞の財の何である乎を我等に示し給うた、蠹喰ひ銹腐り盗人穿ちて盗む所の地に財を蓄ふる勿れ、蠹喰はず銹腐らず盗人穿ちて盗まざる所の天に財を貯ふべしとは彼の教であつた(馬太傳九、二節)、眞の財は地上に積み得べき富ではない、天に貯ふべき聖靈の賜である、汝等の財のある所に心も亦在り、地上の富を積まんとするものは神の事を思はずして地の事を思ふものである、人は神とマンモンとに兼ね仕ふる事は出来ない(四節二十)と、之明白なるイエスの教である、我等は財を天に積むと共に地上の富を貯へ得るものとは思はない、富者の天國に入るよりは略駝の針の穴を通る方が易いと彼は宣べ給うた(馬太傳十九、二四節)、勿論富者は絶対に天國に入り得ないのではない、然しながら富者若し信者であるならば彼は地上の富に自分

の心を置くものでない事は明である、故に彼はその富を以て自己の生活の裕福を計ることは出来ない、富者は財産を以て神の爲に仕ふべし、自己の身を處するに簡素なりや否やは財産の多寡とは自ら別の問題である、イエスの教は明に生活の簡素を説いて居る、生命の爲に何を食ひ何を飲み又身體の爲に何を衣んと思ひ煩ふなかれ、汝等空の鳥を見よ、野の百合を見よ(馬太傳六、二、三、四節)と、乃ち自己の生活の裕福を計るものは信者たらざるの證據である、而してこの事はイエス御自身の生活を憶へば一層明である、彼を多くの御馳走もて饗應せんとして心亂れて居たマルタに對して、汝は多端の事により思ひ煩ひて心勞せり、されど必要なものは僅か、否寧ろ唯一なり(路一加、四十二、四十三節)と教へ給ひしはイエスの日常の生活の實に簡素極まるものでありしことを示して居る、さればイエスと一にな

りイエスの如く父の聖旨を行ふ事を以て糧とし、現在既に溢るゝ恩寵と未來に享受すべき永生の希望とにて心輝ける信者に取つては、簡素質朴の生活に安んずる事の決して偶然でないことを憶ふのである。

第三 偽の信者との共存

信者を迫害するものは獨り不信者のみではない、信者と名のるもの、間にもある、否之等偽の信者より受くる眞の信者の患難は却て遙に大きいのである、若し不信者を狼に譬ふべき場合があるとするれば彼等は狼の装を爲せる狼であつて紛れもなき猛獣であるが偽の信者は之に反し羊の皮を被りたる狼である、その装は柔和にして氣高い、然し裂けたる口と鋭き爪とが其下に隠れて居る、狎々しく人に近づいて實は之を噛まんとするのである、口には主よと稱へて

イエスに頼れるもの、如く見せかけ實は此世に頼つて居るのである、其名は信者であるけれども實は全く此世の奴隸である、而もかゝる偽の信者が信者中の最大部分を占むると聞いては人或は驚くであらうけれども、其が事實であることは少しく今日の教會の内情又は所謂督基教國なるもの、状態を知るもの、拒む能はざる處である、而して彼等に取ては眞の信者は眼の上の瘤である、之を恐れ憚り忌み嫌ふこと蛇蝎の如くである、彼等はむしろ不信者を好む、此世は實は彼等の慕ふ處であるから不信者と提携して此世の勢力を漁り又眞の信者を驅逐せんと欲する、古來誠實單純なる信者を迫害したものは寧ろ彼等に多かつた、而して其手段や實に陰險惡辣である、教會の歴史はその恐るべき幾多の實例を我等に示して居る、預言者を殺して其墓を樹つる者が彼等である、然るに彼等は基督教の初期以來

今日に至る迄絶えた事がないのみならず、其勢力は頗る侮り難いものがある、我等は時として疑はざるを得ない、神はかゝる餘計なるものを何故存置し給ふのであらうかと、彼等は確に信者の重荷である、是故にイエスは慰めていひ給うた、

天國は人畑に美き種を播くに似たり、人々の寝たる間に其敵來り麥の中に稗子を播きて去れり、苗生え出で實りたる時稗子も現はれたり、主人の僕來りて曰ひけるは主よ畑には美き種を播かざりしか、如何にして稗子ある乎、僕に曰ひけるは敵人之を爲せり、僕主人にいひけるは然らば我等行きて之を抜き集むるはよき乎、否、恐らくは汝等稗子を拔集めむとて麥をも共に抜くべし、收穫まで二つながら長て置け、我收穫の時先づ稗子を抜き集めて焚かん爲に之を束ね麥をば我倉に收めよと刈る者にいはん(四十三章二十節)

收穫まで二つながら長て置けとある、我等は收穫まで辛抱せねばならぬ、麥なる信者はキリストによつて天國に獲り入れらるゝ時まで即ち此世に在る限りは稗子なる似而非なる信者との共存は免れないと明言し給ふのである、(收穫に至て彼等が如何にして抜き集めらるゝかは自ら別個の問題である、我等は常に偽の信者と闘ひつゝ唯收穫の日を待つべきである、何故に稗子が早く刈り取られないのであらうか、勿論理由が無くしてはならない、イエスはいひ給うた、稗子を拔集めんとして麥をも共に抜くの恐れがあるからである、即ち稗子を麥と共に收穫の時まで畑に共存せしむるは麥を害せざらんが爲に必要であるといふのである、稗子が成長するは稗子の爲ではない、麥の爲である、麥が收穫を待たずして棄てらるゝが如き虞のない爲に置かるゝのであると、之は深く味ふべき教であると思ふ、偽

の信者は我等の重荷である、然し彼等あるが爲め我等には又特別の恵みがある、彼等と闘ひつゝある間に我等は知らずしてイエスの福音の純の純なる核子を現はし又之を我がものとしつゝあるのである、彼等より受くる迫害を忍ぶ間に神の榮光を輝かすこと多きのみならず、我等自身の信仰も亦之によつて鍛へらるゝのである、而して收穫の日が近づけば近づくほど彼等と我等との差違は愈々明白となり遂に最後に彼等は必ず悉く焚かるゝ爲に拔き集めらるゝのである、現世は來世の爲の準備の場所に過ぎない、若し來世の爲に必要ならば我等は如何なる闘をも喜んで闘はう、稗子の拔かれざるは一には麥の收穫を害せざらんが爲である、二には稗子そのものを抜くに容易ならしめんが爲である、かくて偽の信者はその惡戯を以て實は眞の信者の幸福と自己の滅亡との爲に準備を爲しつゝあるのである。

第四 近親よりの孤立

イエスキリストを信じて次に來る問題は自家屋内に於ける悲劇である、彼を主と仰ぎたる者はその身邊を圍む温き近親の團欒に一大波瀾を起さざらんとするも能はない、是れ素より彼の本意ではない、然しながらイエスは言ひ給ふ、
地に泰平を出さんが爲に我來れりと思ふ勿れ、泰平を出さんが爲に非ず、刃を出さんが爲に來れり、夫れ我が來るは人を其父より、女を其母より、媳を其姑より分たんが爲なり、人の敵はその家のものなるべし、我よりも父母を愛む者は我に協はざる者なり、我よりも子女を愛む者は我に協はざる者なり、(十章三十七節)
これ寔に堪へがたき事である、誰かイエスを信じて此事の爲に泣かざる者ぞ、信者の悲みは此處にある、此處に彼は血肉の愛情と神の

子の要求とのデイルンマに陥るのである、イエスに従はんとして拂ふべき最大の犠牲はこれである、之を恐れて遂にイエスを棄てた者は決して少くない、然し我等はイエスを棄てることはできない、わが救は唯彼に在るのである、わが希望は唯彼に在るのである、然らば立て彼に従はんか、わが福音は泰平に非ず刃なりと彼は明言し給ふ、その家の者を敵とするに非ざれば我に従ふを得ずと彼は教へ給ふ、而してイエスによつて神の我等に賜ふ特別なる恩恵の代償として之は實に已むを得ざる犠牲である、イエスはこの谷を一つ隔て、我等を待ち給ふ、我に従はんことを欲せばその谷を超えて来れと、我等は一度は茲を超えなければならぬ、然らずんば彼の在せる處に往いて真に彼を主と仰ぐことはできないのである、我等のイエスを信ずるは決して唯に自分の救のみの爲ではない、若し彼に従ふ事は自

分のみの救の途であつて我が愛する父母子女とその首途に於て袂を別つたきり永久に再會の望がないならば我は獨り救はるゝの恩恵を或は拒絶するかも知れない、實に若しわが兄弟わが骨肉の爲にならんには或はキリストより絶れ沈淪に至らんも亦我が願である(九羅馬書三章一節)、然し福なる事にイエスキリストはわが救主であつて又わが骨肉の救主である、彼を離れてわが骨肉の救はない、彼は先づ近親中より我を選び我を召し給ふ、而して我が彼に従ふは之やがて又骨肉の救の途が開かるゝ本であるに相違ない、彼は現に約束し給ふのである、

凡て我名の爲に兄弟姉妹父母妻子を離るゝ者は百倍を受けん

(十九章二十九節)

と、茲に百倍とあるは失ひたる父母妻子同胞を回復するの意味であ

ることは同じ教訓を傳へし馬可傳の記事を見れば疑ふことができない、そこには更に註釋を加へて「即ち兄弟姉妹父母兒女を迫害と共に受けんとある(馬可傳十章三節)、即ち近親を離るゝは後に之を獲んが爲である、この希望ありて我等の悲みは癒さるのである、堪へがたき悲劇、然しながら避くべからざる悲劇、我等は神の特別なる恵を彼等の爲に祈りつゝ、暫らく近親より孤立せねばならぬ、是れ我等自身の爲である、又彼等の爲である。

第五 地上の天國

イエスキリストを主と仰ぐものは世よりの迫害を免れないのみならず近親との乖離といふ最も辛き經驗を嘗め貧窮の生活に甘んじ偽の信者と闘ひつゝ、而も尙日に「新なる恩恵を感謝し且其前途に輝く希望を懷いて此世の一生を送るのである、少からぬ犠牲を拂ひ

輕からぬ苦痛を負はせらるゝ裏には又特別なる福を恵まるゝによりて凡て之等を忍び得て尙餘あるのである、然し彼の境遇は是には止まらない、その上にもう一つ特別のものがある、信者同志の間に出來る温き社會である、是は地上の天國と稱すべきものである、勿論人數は少い、又此世の人の作る社會のやうな立派な規則制度はない、否その社會には規則なるものは一もない、唯愛のみである、イエスキリストに在りて結ばるゝ愛のみである、キリストがその社會の唯一の支配者である、彼は常にその中に在りて我等を慰め且勵まし給ふ、而して彼よりの慰藉と獎勵とを以て我等も亦互に慰め勵まし合ふのである、我等は必ずしも人よりの同情を欲するものではない、然し此世に旅人とし寄寓者として存在し來世の窮なき榮光のみを目標として進むものが二三人若くは數十人互に相識るときは茲に特

別の深き同情は湧き來らざるを得ない、是は不信者の間には見ることのできない深き愛である、かゝる愛に繋がれて彼等は假令諸方に散在孤立すと雖もその間に固き團結は自ら出來上るのである、彼等の眞の國は天に在る、其處を望んで彼等は生くるのであるけれども其天國の小なるものを現に此世に於て握ることを得て彼等は歡喜と感謝とに溢れざるを得ない、この社會あるが爲に彼等の信仰と希望との強めらるゝことは決して少くないのである、然りながら誤解するなかれ、之は今の所謂教會ではない、もし汝等の中二人のもの地に於て心を合せ何事にも求めなば天に在す我が父は彼等の爲に之を成し給ふべし、そは我が名の爲に二三人の集まれる處には我も其中に在ればなり(九、二十章十節)之は今の教會と根本に於て其性質を異にするものである、之はイエ

スの名の爲に二三人のもの心を合せて居るのである、故に亦必ずイエスが其中に在り給ふ、即ち我等の小なる家庭がそれである、亦その外に少數の同志がある、然り少數ではあるがイエス御自身が加はつて居給ふのである、而して彼の我等を愛し給ふその深き愛を以て又互に相愛するのである、此社會は之を實驗せずしてその味を想像することはできない、イエスを信じ天國の希望を共にするものゝみが之を味ふことを得るのである。

迫害、貧、僞信者との共存、近親者との乖離、而して地上の天國、これ必ずしも信者の境遇の總てはあるまい、然しその主要なるものたるは明である、而して何れもその由て來る所以を尋ねれば一として深き聖旨に出づる恩恵ならざるはない、之を辛しとし堪へがたしとするは未だイエスを主と仰がざる人である、我等は既に自己に

降りし恩恵と後に顯はるべき榮光の絶大なるを憶ふときは此短き一生の間に於ける暫時の輕き苦を忍ぶが如きは何でもないのみならず、之等の苦そのものが又恵であることを知つて唯感謝の聲を發するの外ないのである。(馬太傳一節)

誘惑

人は此世に在て種々の誘惑に悩まされねばならぬ、本來神に象られて造られし人が自ら進んで罪を犯すの筈はない、彼の罪は悉く誘はれるのである、人類墮落の起源なるアダムの罪が既にそれであつた、然らば我等は誘惑の絶滅せんことを願ふべき乎、否我等は誘惑なき世に唯安然と置かれんことを欲しない、我等は誘惑と闘ひ之に打ち勝たんことを願ふ、自由の意思を以て誘惑に引かれず之を拒絶排斥するの力を與へられんことを願ふ、即ち我等の祈は我等を試探に遇はせず惡より拯出し給へ(馬太傳十六章十三節)ではない、邦譯聖書に斯くあるは誤譯である、試探に遇はせずではない、

我等を試探の中に引き入れ給ふことなく却て悪より拯出し給へ
 である、誘惑來らば來れ、我等は彼に遭遇することを恐れぬ、唯
 其中に引き入れらるゝことなく彼をして空しく退却せしめんことを
 欲するのである、彼の特性は誘ひではなくして試みである、彼に試
 みらるゝを恐るゝに及ばぬ、唯彼に誘はれざるを要する、試みら
 るれども誘はれず、之れ我等の願である、然り願であるけれどもそ
 の力が無い、試みられて誘はれざることは稀れである、然らば如何
 にしてその力を得ることが出来る乎。
 我等は之を自己の経験に照して知る、試惑に遭ひて誘はれんとす
 るときに我等の理想や良心や智識は何の力ともならざることを、自
 ら其事の餘りに卑しく且愚かなるを能く辨へつゝも尚誘はれ行く我
 を引止むる能はざるは我等の實驗である、この時我に向て教訓を説

くも風馬牛である、我等は唯嘗て同じやうな試惑に遭遇して而も遂
 に誘はれざりし人がその切實なる経験を以て我等に同情して呉れん
 ことを要求する、彼が側に立ちて我を慰め、我が左の手を悪魔に渡
 した時に緊かと右の手を握つて呉れるならば我は誘はれんとして誘
 はるゝを得ない、我のみではない、彼もかゝる痛切なる試惑に悩ん
 だのである、彼もこの堪へがたき心持を味はつたのである、而も遂
 に動かなかつた、遂に踏み止まつた、誘惑は空しく彼より手を退い
 たのである、その彼がいま我を助くるのである、彼はわが心持を限
 なく解してくれる、彼の同情は適切である、且有力である、かゝる
 伴侶が我と共に在るならば我は試みらるゝとも決して誘はるゝこと
 はないのである。
 然らばかゝる伴侶が世に存在して居る乎、あらゆる試惑に遭遇し

て而も悉く之に打勝つたといふ人が果して在るであらう乎、曰く在る、但し唯一人である、天上天下、古往今來唯一人しかない、彼は即ちイエスキリストである。

イエスは神の子である、然し彼は同時に紛れ無き人間であつた、我等と均しき血と肉とを備へ空気を吸ひパンを嚙り給うた、人たるの要素は悉く之を具備し給うた、彼が神の子であるとはその聖善の靈性に就いていふのであつて肉によれば即ちダビデの裔であつたのである(羅馬書一、四節)、從て彼にも勿論誘惑が臨んだ、然し實に我等と全く同じやうに様々の試惑が常時彼を悩ましたのである、唯にユダヤの野の四十日間のみではない、決してさうではない、現に彼の晩年に於ても大なる試惑が時々彼を襲うて居ることを我等は四福音書の記事に依りて窺ひ知るに難くない(馬太傳二十章二十四節、約翰傳六章十五節、十章二十四節等)、否唯に又晩

年のみならず、三十年の隠れたるナザレ生活も亦さうであつたらう、聖書はその事につき何の記録をも残さないけれども我等はさう信じ、て差支はない、彼は何處までも人に相違なかつたのである、其故郷にて傳道を爲し給ひし時彼の生立以來の生活を熟知せる隣人はあの普通人と別に違はなかつたイエスに凡て之等の事は何處より來りしやといひて信ぜざりしに徴しても思半ばに過ぐるものがある(馬太傳五十四節以下)、馬太傳四章等に載せられたる所謂イエスの試惑は決して一時の物語ではない、彼の全生涯を通じての試惑とそれに對するイエスの態度との縮圖に外ならぬことは其記事を翻味して知る處である。第一茲に試惑の種類が三つ示されて居る、四十日間の飢餓の後に來れるパンの試惑はその一である、聖殿の頂上より身を躍らして萬人の喝采を博せんとする名譽の試惑はその二である、惡魔に跪拜し

て全世界を手に入れんとする富の試惑はその三である、肉慾と名譽と富と、是はこれ人類試惑の三大代表者ではない乎、我等に迫り来る凡百の試惑は畢竟この三のものを以て代表させることが出来るのである、我等はユダヤの野に於けるイエスの三試惑を偶然のものとして見逃し去ることは出来ない、茲に深き意味がある、痛切なる肉慾の試惑と赫々たる名譽の試惑と強大なる富の試惑と、この三に遭遇するは即ち一切の試惑に遭遇することである、この三に打勝つは即ちあらゆる試惑に打勝つことである、此の如くに見てこの四十日間のイエスの經驗は實は我等の一生に深き關係ある大事件である。イエスは四十日四十夜食ふことをせず遂に飢えたりとある、イエスも亦人である、永き間の絶食によつて彼の感じ給ひし飢餓の程度はよく之を想像することが出来る、實に飢餓の前には徳義も耻もな

いのが人の例である、肉の糧に對する痛切なる要求の下には靈の糧を憶ふが如き餘裕はない、イエスは今この飢餓に陥り給うた、而して彼は人であると同時に神の子である、彼はその飢を癒すに難くない、小石の累々たる曠野も彼に取ては穀物の倉に均しい、彼一たびその神の子たるの能力を揮ひ給はん乎、石を變じてパンと爲し得べく以てその堪へがたき飢を癒すに足る、事は容易にして且刻下の急である、惡魔の心付きは此處であつた、故に來り囁いて云ふ、汝若し神の子ならば命じて石をパンと爲せと、人なるイエスの心は動かざらんとするも能はなかつたであらう、然し彼は知り給うた、自己の肉慾の満足の爲に奇蹟を行ふは神の子たるの特權を濫用するのである、その時靈が形を潜めて肉が跋扈するのである、是即ち靈の肉に對する降服である、飢の爲に神を忘るゝものであると、彼は假

令一瞬間の間たりとも父なる神を忘るゝことはできない、彼の心は動
 かんとして又父に一瞥を與へた、而して限なき慰藉と力とは忽ち其
 處より流れ來つた、肉慾は暫らく其要求を撤回した、即ち
 人はパンのみにて生くるものにあらず、唯神の口より出づる凡て
 の言に因る
 と、信仰である、信仰である、神を信する者は神を忘れ自己の手を
 もて肉の糧を獲むと欲することはできない、神は我等の必要物を悉
 く知り給ふ、我等は一片のパンと雖も神與へ給ふにあらずんば之を
 口にすべきではない、まづ神の國と其義とを求めよ、然らば此等の
 ものは皆汝等に加へらるべしである。(馬太傳三十三章)
 第一の試惑は見事に斥けられた、然し忽ち又第二の試惑がやつて
 來た、其れは肉慾ほど痛切ではなかつたかも知れない、さりながら

赫々たる光輝を以て眼を眩せんとする 聖殿の絶頂よりの飛躍と天
 使の奉仕、是れ教主に有り得べき奇蹟であつて神の子にふさはしき
 名譽である、加之聖書の言葉までが裏書をして居る、如才なき惡魔
 は今やイエスの武器を以て却て彼を刺さんとするのである、彼の心
 は又も迷はざるを得ない、事は單に自分の肉體の満足のみではない、
 世を救ふ爲の奇蹟である、聖書の言葉の實現である、茲に再び靈性
 と野心との戦が開かれた、然しながらイエスは遂に自己の野心を充
 すが爲に一瞬時たりとも父を忘るゝことが出來なかつた、人なる彼
 が自己に事ふるときは即ち父なる神を離るゝ時である、是彼の忍ぶ
 能はざる處であつた、彼は神をして自己に仕へしむることは出來な
 かつた、主たる汝の神を試むべからずと、父に對する一瞥は又も彼
 をして試惑に打勝たしめた。

肉慾彼を誘ふべからず、名譽亦彼を惑はしむるに足らず、是に於て残る處は唯一あるのみである、富！肉慾ほど痛切ではないかも知れない、名譽ほどきらびやかではないかも知れない、しかし人の心を誘ふ力の強大なる此の如きは又少いのである、今の世に於て殊にさうであるが二千年の昔に於ても多く異なる處はなかつたであらう、富は實力である、權威である、肉慾に淡く空名に憧れざる着實の士にしてこの試惑の前に膝を屈したる者は幾何ぞ、悪魔に取て今は最後の手段に訴ふべき時である、是故にその提供は思切て大くあつた、一時の満足一時の冒険ではない、萬國とその榮華、是彼の奥の手である、之を盡して最早彼の手は空しくなるのである、從て其要求は今や最も露骨であつた、曰く汝若し俯伏して我を拜せば此等を悉く汝に與ふべしと、代價は極て廉い、唯俯伏して彼を拜するのである、

如是して萬國とその榮華は得られるのである、救主の使命を完うするの捷徑は茲に在るのではないか、萬國を一日も速く神に獻げんが爲に唯の一度悪魔を拜することは果して忍び得ざることであらうか、人なるイエスは確にかゝる試みを感じ給うたに相違ない、彼は我等の感ずる凡ての試みを感じ給ふのである、茲に三たび靈性と慾望との戦が戦はれた、そして三たび父の一瞥が彼を救うた、殊に悪魔の態度の鮮かでありし丈けイエスの心に醒めたる父の姿も亦鮮かであつた、彼は今や聖書の言葉のみを以てしては物足りなかつた、彼自身の靈性は先づ激語を放つて悪魔の面貌に痛棒を喰はしめた、サタンよ退けと、實に是で足りるのである、しかし聖書の言葉は更に彼の爲に最後の止めを刺してくれたのであつた、主たる汝の神を拜し唯之にのみ事ふべし

と、是である、是である、是で事がきまるのである、肉慾の試惑も名譽の試惑もはた富の試惑も是さへあれば恐るゝに足りない。如此してイエスの試惑は終つた、終に悪魔彼を離れ天使たち來り事ふとある、しかし誤解してはならない、繰返して言ふ、イエスの一生中再び試惑が臨まなかつたのではない、彼の地上の生活は何處までも人としての生活であつた、故に幾多の試惑が絶えず彼を悩ましたに相違ない、唯闘の結果はいつも之であつたのである、勝利は常に彼に在つたのである、試みられるれども遂に罪を犯さず、弱き肉體を以てして靈性の勝利を謳歌し給ふ、その秘訣は外にはない、唯彼の眼が父を離れなかつたからである、父の温顔こそは實に一切の試惑に勝る力であつた、之を見守りて悪魔の聲は耳の底に達かないのである、イエスは我等の受くべき凡ての試惑を受けて、而も唯常

に父と共に在り給ひしが故に、嘗て一度も誘はれ給はなかつたのである。

そのイエスキリスト今は聖靈として我等の心に宿り給ふ、我等は彼の姿を見ない、その聲を聞かない、然し確實にその力を感ずる、彼が十字架の上に顯はし給ひし愛を見て彼の前に跪きしより今まで有らしことなき不思議なる力が現實に我を支配して居ることを實驗する、眼にて見る能はざる彼が常に我が伴侶として側に在り我を助け給ふことを實驗する、彼はわが唯一の伴侶である、事毎に我が訴ふる者は彼である、訴へて慰められざるはない、殊に彼は我等の受くべき一切の誘惑を既に經驗し給うたのである、我等は如何なる誘惑を以て訴ふるも彼の應へ給はざるものとは無い、熱き涙と温くして緊き手とが常に我を待つのである、

我等が弱きを思ひやること能はざる祭司の長は我等に在らず、彼
 は凡の事に我等の如く試みられたれど罪を犯さざりき(希伯來書四)
 實に恃もしきものにして彼の同情の如きはない、何となれば弱き我
 等の凡ての経験を自ら嘗め而も悉く之にうち勝ち給うたからである
 彼を伴侶とすることを得て我等はもはや誘惑を恐れぬ、來れ、肉
 慾、名譽、富の試惑、我は唯わが友イエスに赴く、我はたゞ仰いで
 彼に訴ふる、而して彼の同情を受くるときに誘惑の手は自ら我を離
 るるのである、力は我にない、然し勝利はある、彼に依て我は如何
 なる誘惑にもうち勝つのである。

歡喜と感謝

十字架を負ふの歡び

イエスキリストをわが主であると感じ、主よと呼びて彼に頼るこ
 とは必ずしも難くない、自己衷心の要求に忠實なる者にして少しく
 彼の性格に就て學び得し者に取てはかく感じかく呼ぶことは寧ろ自
 然である、現に今日多數の人々が自らイエスの弟子なりと稱して生
 活して居るのである、慕ふべき彼の聖名を口にして彼に信賴するの
 心を表はすは決して悪きことではない、此の如くして我等も亦彼の
 足跡を踐まんと欲するのである、然しながら彼に従ふことは彼を主
 と呼ぶことの如く容易ではない、彼の人格に讚美の心を傾倒する者

も彼に從はんとして屢々躊躇ふのである、若し我に從はんと欲ふ者は己を棄てその十字架を負て我に從へど、是れ彼の提出し給ふ要求である、實に難問である、人生最大の難問である、我等はイエスの生涯殊にその死を憶ふときは、自らも亦十字架を負て彼に從ふの、即ち彼に酬ゆるの所以であるを知り、彼の要求の決して過當ならざるを思ふ、而して又幾度か之を實行せんと試むるのである、然しなから事は實に容易ではない、十字架！之を彼方に置いて仰ぎ見れば榮光かがやくを覺ゆる、之を自ら手にせんとすれば我手戦くのである、何ぞ主の十字架の貴くして己が十字架の厭はしきや、その罪標に「ユダヤ人の王イエス」と記されしを見ては寔に感激に堪へない、然るに見よ其處に我が姓名を記されては我は慄然たらざるを得ない、我は滿身の勇氣を鼓して之を負はんとするも力足りない、強て之を

肩にせんとすれば我眼眩みてもはや主の十字架の榮光をさへも見る事が出来なくなる、その時我が内心も亦我を裏切つていふのである、汝、田地を買ひたれば往きて視ざるを得ざるに非ずや、汝五綱の牛を買ひたれば之を試むる爲に往かずや、汝妻を娶りたるに非ずやと(路加傳二十四章)、かくして我は遂に十字架を負ふことが出来ないのである、自ら主よと呼びながら其跡に隨て往くことが出来ない、自分の要求は何事でも彼の名に託つて祈りながら唯一つの彼の要求を受け容るゝことが出来ない、是れ信者の苦衷である、之を憶うて心痛まざるものは偽善者に非ずんば白痴である、實に十字架を負ふことは人生の最大問題である、かゝる重大にして困難なる問題が自分の力で解決し得やう筈はないのである、信者が事を爲すに一々祈を要するならば況してこの難問をや、之は祈る

に最もふさはしき問題である、祈つて其まゝに聽かるべき事柄である、如何なる祈が聽かれずともこの祈だけは聽かれない心配がない、何となれば是れ主の欲し給ふ處である、神御自身の要求である、かかる祈こそ安んじて主の名に託つて捧ぐべきである、今日未だその時機でないならば願はくは明日之を成らせ給へと、此の如くして我は日にくわが神に迫るのである、朝より夕まで刻々に主の招きを待つのである、その時が何時到來するかは知らない、唯祈りつゝ今か今かと待つのである。

かくする内に主と我との交は愈々親しみを加へる、從來襖を隔てて聞きしやうなる彼の聲は次第に耳元に近くなる、帷の陰に蔽はれてありし彼の姿は著るしく明瞭に見得るやうになる、殊にその十字架上の姿は愈々深き印象をわが心に刻んで最早暫らくも忘れがたく

なる、我等の爲、特に我が爲、かゝる死を味ひ給ひしと思へばその限なき愛の心はわが全心を涵して我を囚へて終ふのである、キリストの愛我を勉せしめ、かくまで彼に愛せられて我心は醉はざるを得ない、今や彼は深くわが裏心の髓にまで喰ひ入つて居る、彼を振り放さんとするも能はない、彼を脱れんが爲め出で、野に往けば則ち彼も亦我と共に野に往くのである、入て雑踏の巷に隠れんとするも彼は尙來りて我が眼前に立つのである、眼を閉づれば彼の姿愈々鮮かに浮び耳を蔽へば彼の聲益々牙かに聞ゆる、睡りて彼を忘れんとすれば則ち夢に彼を見るのである、噫神の子イエスキリストは今やわが戀である、何人も彼に奪はれしわが熱情を割くことは出来ない、我自身と雖も亦奈何ともすることが出来ない、彼が招くのである、彼が我名を呼びつゝあるのである、聞かざらんと欲するも聞ゆる、

彼の呼ぶのが明瞭に聞ゆる、あゝ呼ぶ、呼ぶ、我は往かざるを得ない、誰が往かずとも我だけは往かざるを得ない、よし其道は何であらうとも我は往かざるを得ない、彼に呼ばれて我が時は来たのである、美田も今や十字架より外に我が負ふべきものはないのである、新妻も五耦の牛も我を止むることは出来ない、我自身の無力も亦何の妨げにならない、キリストの愛我を餘儀なくするのである、彼の手に助けられて十字架は遂にわが肩に上るのである。

嘗て之に觸れんとして我手戦さし十字架は素より苦痛である悲哀である、そのことは今と雖も少しも變らない、死は其影である、之を負うて死の苦き杯を飲まざらんと欲するも能はない、之を持つ手は血と涙とに塗れざるを得ない、別離の悲哀はどうしても渡らなければならぬ谷である、骨肉の親みより離れ生活の保證より離れこの

世の人の幸福と稱する凡ての條件より離れて孤獨貧窮迫害の衣を着なければならぬ、之を外側より見て何の美しき姿があらうか、何の温き装があらうか、十字架は何處までも十字架である、之は白金や大理石にて作りし床の間の飾物ではない、之は嘗て棘の冠を戴きたる人が其上に両手を展べて血を流したる木の架である、之に良き薫りのする筈はない、死が恐るべきものである以上十字架は恐るべきものである、之を負ふは苦痛である、悲哀である。

噫、然し乍ら十字架に絶大の歡びがある、之を負ふ者の胸に此世ならぬ歡びがある、外なる人は迫害に悩むとも内なる人はいひがたき歡喜に充ちて唯感謝を繰返すの外ないのである、彼の外貌の零落すると均しく、否それよりも遙か以上に彼の胸裏の光景は一變するのである、彼の狭き胸の中に新しきエルサレムが描かれるのである、

天國天國といひて遠き彼方墓の向側に想像し居たるその神の國が今や歴然とわが胸裏わが周圍に實現するのである、我等此處に在て恒に存つべき城邑なし唯來らんとする城邑を求む、然しながら我等の希望は空しき想像ではない、此世に在て少しも實驗する能はざる空しき想像のみに希望を置くは我等の耐ふる能はざる處である、我等は信頼すべき確實なる商人と取引をするにも尙見本を取寄するのである、即ち彼が見本通りの商品を提供することに於て信頼して疑はないのである、是れ弱いといへば弱いのであらう、然しながら人生の事實である、之があるが故に神を見るにもキリストを要したのである、天國の希望も亦さうである、我等此處に在て恒に存つべき城邑はない、然し來らんとする城邑の質は之を有つことが出来る、天國の模型は之を實現することが出来るのである、之を實現して我等の

心は安んずるのである、多年たゞ想像の裡にありし新しきエルサレムを今わが身邊に實現して我はいひ知れぬ歡喜に溢れざるを得ないのである、ハレルヤ！わが故國は之である、わが行先は之である、この世の勞働を終へて暮鐘の音に送られつゝわが歸り行く樂しき家は之である、かゝる家が墓の彼方に待つならば死は實に感謝すべき旅路である、かゝる天國の質を握ること、それが十字架を負ふの歡びである、而して十字架を負ふに非ざればこの歡びは味ふことが出来ないものである。

天國とは多分父なる神及主イエスキリストの愛のほか何の法則も束縛もなき自由にして平安なる國であらう、今十字架を負ひたる我が心は即ちそれである、主イエスに身を委ねながら尙腐れ縁の切れざる彼の主此主に時々秋波を送らざるを得ざりし昔の辛さを今や

奇麗に洗ひ流したのである、今や主の愛のほかには、我を縛る繩はない、盗賊の來るが如く密かに我心に忍び込むこの世の主を迎ふるの苦心は要らない、唯慕はしき主イエスのみの爲に安んじてわが全生を捧げまつるのである、彼が右せよと命じ給はんか、何の願慮する處もなく右するのである、彼が左せよと命じ給はん乎、唯々として左するのである、かくして今日彼の國に召し給はん乎、我は何の後髪引かるゝ思なくして喜び勇んで出立するのである、實に人心を解放するものにして十字架の如きはない、之を負うて恰も靜なる大洋に漕ぎ出でたるの感がある、その洋々として而も安らかなる光景は之を實見せざるものに説明することが出來ない、その見渡すかぎり隅から隅まで輝々たる日光の照すに委せたる壯快なる景色は確に現世的ではない、此處に彼國の面影を認むることが出来る、この自由と平

安とは多分天國の生活の反映であらうと思ふ。
 天國とは多分純なる無私の愛を以て兄弟姉妹の相交る處であらう、先んじて其處に在る者は後れて來りし者を迎ふるに相抱いて喜び祝する處であらう、十字架を負へる者の小さき社會は亦其である、彼の家庭は今や一點の緩みなき觸るれば凍々と鳴り響くやうなる純金の愛を以て堅めらるゝのである、彼の先達は彼を迎へんが爲に遠くより趣り往き……いと善き服を之に衣せ其指に環をはめ其足に履を穿せ又肥えたる積を宰りて共に樂むのである(十路加傳)若し之をしも天國の質でないといふならば天國とは望むに足らぬ處であると思ふ、世の人々が悔みの詞を以て見送りつゝある間に同志の者は既に所を備へて彼を迎へるの準備を爲して居るのである、人生の失敗者の如くして送り出された時に彼の恵まれたる新生活が初まるので

ある、墓の彼方の復活も亦かゝる者に非ずして何ぞや、我は復活の
 状態を理論によつて断定することは出来ない、然しその心持は之を
 味ふことが出来る、天國に於ける兄弟の交りは之を此世に於て経験
 することが出来る、永生の歡びは既に今より之を感ずる事が出来る。
 蓋し神はキリストを信する者に約束するに永生を以てし給うた、
 しかし我等の神は何處までも思ひやり深き神である、彼は唯約束の
 みに止め給はない、彼は我等の希望を堅く繋がんが爲に約束に添へ
 て質を賜うたのである、

我等を汝等と偕にキリストに堅固し且われらに膏を沃ぎしものは
 神なり、彼また我等に印し且質として靈を我等の心に賜へり、
 (林

多後書一章二
 十一、十二節)

それ此事復活に應ふ者と我等を爲し給ふ者は神なり、彼れ靈を其

質となして我等に賜へり、(同五章)
 萬事を其意のまゝに行ふ者おのれの旨に循ひて豫め我等を定めキ
 リストに在て嗣子と爲ることを得しむ：：汝等もキリストを信じ
 我等が業を嗣ぐの質なる約束の聖靈を以て印せらる、(以非所書一
 げに如何にも神らしき質である、この貴き質を與へられて我等は來
 らんとする城邑にすべての望をかけるのである、然らば之を受くる
 が爲に我も亦何か献げ物を爲すべきではないか、わが全心を彼に捧
 ぐるの印として何かふさはしき贈物がないか、恰もよしキリスト自
 らその選定を爲し給ふ、曰く十字架を負へと、之ある哉、聖靈に應
 ふるに十字架を以てして神と人との約束は成立するのである、この
 十字架を負ふに非ずんば聖靈は確實に我がものとはならない、神の
 約束の質を受くるにはこの一つの條件だけは履まなければならぬ、

心の貧しき者は福なり

二人祈らんとて殿に登りしが其一人はパリサイの人、一人は税吏なりき、(八章十節)

一は宗教家である、他は俗吏である、祈禱と断食とによつて神に親ひは前者の得意とする處である、誅求と苛斂との中に自家の懐を肥さんとするは後者に有りがちの罪惡である、いま二人の者ともに祈らんとて殿に登る、彼等は果して如何に何を祈る乎。

パリサイの人立ちて自ら如此祈れり、神よ、我は他の人の如く強索、不義、姦淫せず、亦此税吏の如くにも有らざるを謝す、我れ七日間に二次断食し又凡て獲るもの、十分の一を献げたり、(十一章十三節)

彼は流石に宗教家であつた、彼は神の前に立ちて己が日頃の行を回想しその正しきを感謝せずには居られなかつた、彼は此時道德上の勝利を感じて一般人に對し殊にその側に立てる俗吏に對して深き誇を抑へあへなかつた、我が徳行を見よ、わが信仰の力を見よと恐らく彼は心の中に囁き而して自ら満足したであらう、彼は又神に對する義務をも缺かざるを知つた、一週二回の断食と十分一の獻物とはわが怠る處に非ず、我は神に對しても何の疚しきことあるなし、俯仰天地に愧ぢざる者は我なり、と此の如くに思ひ廻らして彼は畢竟自己讚美の裡にその祈禱を終つた。

之に反し憐むべきは税吏であつた、素養の深きものあるなく徳行の誇るべきものあるなく宗教的義務の勵行あるなく却て平常の生活を願みれば願みる程慚愧の念に堪へざるものが多かつた、彼は嘗て

貧しき村人を責むるに荒らかなる言語と不親切なる態度とを以てし
 たることを思ひ起したであらう、金銭勘定に淡泊ならずして不義の
 財を手にしたることをも思ひ起したであらう、怠慢、冷酷、利己其
 他あらゆる罪惡の追想にそる胸痛み足の歩みもとかく澁りがちで
 あつた、加之彼は神に對して何の盡すべきをも盡さない、彼は自
 己の胸中を探りて何の確信をも發見することができない、祈りに往
 くといふ、然し余に果して信仰なるものがあるのであらう乎、否徳
 なく智なく愛なきは勿論わが信仰と稱すべきものさへ有たない、余
 は正に無一物である、何を以て神に見ゆることを得やうか、と斯の
 如く彼は感じたであらう、されば彼に取ては神殿に近よる事さへ何
 となく心苦しかつた、
 税吏は遙に立ちて天をも仰ぎ見ず其胸を拊ちて、神よ、罪人なる

我を憐み給へと曰へり、(同三節)
 彼は今自己の心の貧寒なるを思つて悲みに堪へない、何と祈るべき
 かをも知らない、神に向て自己をいひ表はすに他に言葉はない、唯
 「罪人である、然し實に罪人なる我である、何の誇るべきものもない、
 唯憐み給へである、神よ罪人なる我を憐み給へと、之れより他に彼
 の祈るべき言葉はなかつた、神は我に何一つ善き物のなきを悉く
 知り給ふ、願はくはかゝる我を憐み給へと言ひて我なるものを神の
 前に投げ出すの他はなかつた、憐むべき税吏！共に祈りしパリサイ
 の人に對しても如何に心愧しく感じたことであらう。
 然しながらイエスは猶附け加へて言ひ給ふ、我汝等に告げん、此
 人は彼人よりは義とせられて家に歸りたり(同四節)と、此憐むべき税
 吏の方が彼尊敬すべきパリサイの人よりも神の前に義とせられたの

である、神は信仰と道徳との優れたる宗教家よりも罪の思出のみ多くして力無く心貧しき一俗吏を愛で給ふのであると、茲に人の眼と異なりたる観察がある、茲に此世の判断と正反對なる評價がある、税吏は何故に義とせられパリサイの人は何故に義とせられなかつたのである乎。

イエスが按られんがため人々幼児を携れ來りしに弟子たち見て之を責めたり、イエス幼児を呼び弟子に曰ひけるは、幼児を我に來らせよ、彼等を禁むる勿れ、神の國に居る者は是の如き者なり、誠に汝等に告げん、凡そ幼児の如くに神の國を承けざる者は之に入ることを得ざるなり、(十章七十五節)

イエスが幼児を近づけ給ひしはその無邪氣なるが故ではない、純潔なるが故ではない、その母を承くる態度の何處までも信頼一方であ

るからである、幼児の母に對するや唯絶對の信頼のほか何もない、愛せらるゝも絶對のである、叱らるゝも絶對のである、たとへ彼れ我れを殺すとも彼に頼り恃まむと(約百五節十三)、之れ幼児の本心である、而してその此の如くなるは何の故であるか、問ふ迄もなく自身何の力をも有しないからである、自ら何の恃むべき處なきが故に心をうち開いて唯母と頼り絶對の他を知らないのである、幼児に自ら恃む處の生ずる時は即ち母に對する信頼のやゝに薄らぐ時である、至極の無力、故に絶對の信頼、而してイエスは曰ひ給ふ、凡そ幼児の如くに神の國を承けざる者は之に入ることを得ざるなりと、幼児が母を承くる如くに神の國を承くる者のみ之に入ることを得るのであると、即ち知る、無力無一物はこれ神の國に入るの條件ではない乎、自ら顧みて罪のほか何の善き物なく心貧しくして唯愧づるの

みなりしかの税吏の義とせられしは寔に故あるかな、彼は多分わが信仰と稱すべきものすらなきを悲しんだであらう、況んや確信といふが如き力は一も有たなかつた、それにも拘らず神の前に義とせられたのである、否、その故に義とせらるゝことを得たのである、母に縋る幼児に何の確信あらんや、彼にして若し自ら語り得るならばいふであらう、我にわが信仰なるものあるなしと、然りわがものと稱し得る何一つも無ければこそ其儘にたゞ母を仰ぐのである、税吏彼れ何故神に縋ることを得たる乎、彼に徳なく智なく愛なく實に彼の信仰と稱すべき力さへも無かつたからである、罪人なる我をといひてその身そのまゝ神の前に投げ出すことを得たるは即ち彼にパリサイの人の如き自ら誇るべき何物も有たなかつたからである、我等はどうかすると自己の信仰の弱きを歎きて甚しきはもはや神に縋

るの力も我にはなしとさへ思ふことがないではない、然しながら神に縋るの力とは果して何の謂であるか、幼児が母に縋るに何の力を要する乎、力無くてこそ勿怪の福である、我に何の誇るべく恃むべきものなくわが信仰と稱すべきものも無くなつた時に初めてイエスキリストを我が主と仰ぐことができる、言ふをやめよ、我が信仰我が確信と、信仰がわがものとなりわが家又はわが金といふが如く自己の所有物財産の一に數へらるゝ時信仰はもはや信仰ではなくなつたのである、信仰は信頼である、倚頼である、税吏は幼児の母に倚頼する如くに神に信頼するを得たから義とせられたのである。或る宰問うて曰ひけるは、善き師よ永生を嗣ぐ爲に我れ何を爲すべき乎、イエス彼に曰ひけるは……誠は汝が知る處なり、姦淫するなかれ、殺す勿れ、竊む勿れ、妄證を立つるなかれ、